

特20

25



標註
今
文古事記

文學博士 井上頼圀題言

池田常太郎譯註

東京

日就社發行

明治
44. 5. 5
丙寅

題言

古事記は、そのかみ、恐かしこくも、天武天皇の御代、諸家の祕藏し居りたる、帝紀及び本辭等の古書中より、特に最良のものを、御選擇ましましたるものにて、竟に此事は、邦家の經緯、王化の鴻基なり」と、宣のたまはせられしに見るも、本記が如何に重寶にして、且つ必要なるかを知るに足るべし。されば天皇は、如何ばかり此事に大御心を勞し給ひしか、推察し奉るだに、恐懼の外なし。史に飛鳥清原大宮御おほしませしをしろしめすすめみこと大八洲天皇とあるは、則ち、此の天武天皇の御事なり。

此の天皇の御徳の高く優れましますことは、申すまでもなく、御智識もまた、極めて廣大にして、深く上古の事を探究し給へり。是に於てか、天皇は、眞實なる古傳を、後世に傳へしめんと、思し召され、當時記憶力の最も勝れたる、稗田阿禮に詔して、讀み習はしめ給ひしかど、彼れ此れさし障り起りて、未だ其事を終らざるに、惜むらくは、天皇崩御あらせられたり。爾來この事は、元明天皇の和銅四年九月まで、絶えて行はれざりしが、時恰も、太安萬侶に詔ありて、稗田阿禮が暗誦せる、勅語の舊辭を、撰錄せしめ給ふ事となり、超えて翌五年正月二十八日、全

く功成り、之を上奏するに至れり。

本記に就て、茲に一の注意し置くべきは、世の史家が、天武天皇の唯、御記憶のまゝを、阿禮に勅語し給へるもの如く、誤り傳ふるの一事なり。當時帝紀本辭等の如き古書は、依然嚴存したり。即ち天皇は、阿禮の記憶力を恃ませられ、御親ら、該古書の讀法を、暗誦せしめ給ひしまてにて、決して古書によらせ給はざりしに非ず。然れば安侶卿の撰録の時にも、姓の「クサカ」を日下と書し、名の「タラシ」を帶と記し、如此き類は本書のまゝにして、之を改めざりき。故に本記は、まのあたり、勅語を拜聽し奉る

と、同様にして、洵に忝けなき極みにこそ。

更に進んで、國民道德の上よりいへば、今上陛下の御代となりて、宣し給ひし教育勅語にある、皇祖皇宗、肇國樹德の文義の如き、本記を讀まざしては、とても解し得らるゝものに非ず、苟も日本國民として、皇祖皇宗の御恩澤に浴するものは、須らく本記によりて、其深遠なる我が建國の體制を審にせざるべからず。

唯、その文辭の古朴なるが爲に、甚だ讀み難きの憾みありしも、本書は、之を現代の文章に書き更めたるものなれば、何人も、之に據て、我が古代史の研究に、便りを得る。

事、少なからざるべく、時に取りて、至極適當の企てと云ふべし。是れ一言を卷首に題する所以なり。

明治四十四年四月

文學博士 井上 頼 圀

上古事記表

臣安萬侶言す、夫れ混元既に凝り、氣象未だ效はれず、名も無く爲も無し、誰か其形を知らん。然して乾坤初めて分れて、參神造化の首を作し、陰陽斯に開けて、二靈群品の祖たり、所以に幽顯に出入して、日月目を洗ふに彰はれ、海水に浮沈して、神祇身を滌ぐに呈はる、故に太素の杳冥なる、本教に因て而して土を孕み島を産むの時を識り、元始の綿邈たる、先聖に頼て而して神を生み人を立つるの世を察らかにす、寔に知る、鏡を懸け珠を吐て、百王相續ぎ、劍を喫ひ蛇を切て、萬神蕃息すること、安河に議して天下を平げ、小濱に論じて國土を清む。是を以て番仁岐命、初めて高千嶺に降り、神倭天皇、秋津島に經歷し、化熊穴を出て天劍高倉に獲、生尾徑を遮り、大鳥吉野に導く、舞を列ねて賊を攘ひ、歌を聞いて仇を伏す。即ち夢に覺りて神祇を敬ふ、所以に賢后と稱す。烟を望んで黎元を撫す、今に於て聖帝と傳ふ。境を定め邦を開て、近淡海を制し、姓を正し氏を撰んで、遠飛鳥に勤す。歩

驟各異なり、文質同じからずと雖も、古を稽へて以て風猷を既に頽れたるに繩し、今を照して典教を絶えんとするに補はざるなし。飛鳥の清原大宮に、大八洲を御めし、天皇の御世に暨びて、潜龍元に體し、海雷期に應ず、夢歌を聞て業を纂むことを想ひ、夜水に投じて基を承むことを知る。然れども天時未だ臻らず、南山に蟬蛻し、人事共に洽ねくして東國に虎歩す。皇輿忽ち駕して、山川を凌ぎ渡り、六師雷の如く震ひ、三軍電の如く逝く。杖矛威を擧て、猛士烟の如く起り、絳旗兵を耀かして、凶徒瓦の如く解く、未だ決辰を移さずして、氣沴自から清まる。乃ち牛を放ち馬を息へて、愷悌を華夏に歸り、旌を巻き載めて、儷詠を都邑に停む。歳は大梁に次り、月は夾鐘に躡りて、清原大宮にして、昇つて天位に即きたまふ。道は軒后に軼ぎ、徳は周王に跨ゆ。乾符を握つて六合を摠べ、天統を得て八荒を包ぬ、二氣の正に乗じ、五行の序を齊へ、神理を設けて以て俗を奨め、英風を敷て以て國を弘む。重加智海浩漣として、潭く上古を探り、心鏡煒煌として、明かに先代を觀る。是に於て

天皇詔したまはく、朕聞く諸家の賚らす所の、帝紀及び本辭、既に正實に違ひ、多く虚偽を加ふ、今の時に當て、其失を改めずんば、幾年を経ずして、其旨滅びんとす、斯れ乃ち邦家の經緯、王化の鴻基なり。故に惟に帝紀を撰録し、舊辭を討覈して、偽を削り實を定め、後葉に流へんと欲すと。時に舍人あり姓は稗田、名は阿禮、年是に二十八、人と爲り聰明にして、目に度れば口に誦み、耳に拂れば心に勤す。即ち阿禮に勅語して、帝皇の日繼、及び先代の舊辭を誦み習はしむ。然れども運移り世異りて、未だ其事を行はさりき。伏して惟ふに皇帝陛下、一を得て光宅し、三に通じて亭育し、紫宸に御して、徳は馬蹄の極むる所に被り、玄扈に坐して、化は船頭の逮ぶ所を照す。日浮て暉を重ね、雲散じて烟に非ず、柯を連ね穂を併すの瑞、史に書すことを絶たず、烽を列ね譯を重ねるの貢、府に空月なし、名は文命より高く、徳は天乙にも冠れりと謂ふべし。於焉、舊辭の誤り忤ふを惜み、先紀の謬り錯れるを正さんとし、和銅四年九月十八日を以て、臣安萬侶に詔して、稗田阿禮が誦す

る所の勅語の舊辭を撰録して、以て献上せしむ、謹で詔旨に隨ひ、子細に採り撫ふ。然れども上古の時、言意並に朴にして、文を敷き句を構ふるに、字に於てするは即ち難し、已に訓に因て述べたる者は、詞心に逮はず、全く音を以て連ぬる者は、事の趣き更に長し、是を以て今或は一句の中、音訓を交へ用ゐ、或は一事の内、全く訓を以て録す、即ち辭理見えがたきは、註を以て明らかにす、意況解り易きは更に註せず、亦姓の目下に於て玖沙訶と謂ひ。名の帶の字に於て多羅斯と謂ふ。此の如きの類、本に隨て改めず、大抵、記す所は、天地開闢より始めて、以て小治田の御世に訖ぶ。故に天御中主神より以下、日子波限建鵜草葺不合尊より以前を上巻となし、神倭伊波禮毘古天皇より以下、品陀の御世より以前を中巻となし、大雀皇帝より以下、小治田大宮より以前を下巻と爲し、并せて三巻を録し、謹で以て献上す、臣安萬侶、誠惶誠恐頓首頓首

和銅五年正月二十八日、正五位上勳五等太朝臣安萬侶 謹上。

讀者へ一言

●凡そ國性を知り、國民道德の淵源を極めんと欲せば、何人も先づ其國の古代史を研究せざるべからず。古事記は我國唯一の古代史にして、神代以下、推古天皇の朝に至り、殊に神代に於ては、其事實を忌憚なく赤裸々に記録して、毫も文飾を用ひず、史學上、頗る有益の書として、尊敬を拂はれつゝあり。

●然るに其言語文章、甚だ古朴にして、古訓古事記は、之を通讀するも、容易に其意味を捕ふる能はず、由來學者の遺憾とするところ。是れ「今文古事記」の發行を企てたる所以なり。

●唯だ虞る、漫に古文を今文に改譯する時は、古文の莊重典雅を傷けて、今文の卑俚拙俗に陥り、古書をして其妙味の大半を失はしめん事を。

●就ては一見したる所にては、尙ほ幾分か解し難き所なきに非ざるべしと雖も、努

めて原意を失はざらん事を期し、随て其文章も、今文とは云へ、或る程度までは原文の語法を守る事となせり。是れ譯者の苦心せる所なるが、此古色の存する所、却て妙味の津々たるを覺えずんばならず。

●斯る次第なれば、文中往々、古語を其まゝに用ゐ、就中歌謠は、改譯殆んど不可能なるが故に、單に假名交り文體に書き改めたるのみにて、全然、古語を其まゝに用ゐたれば、之が爲に上欄に註釋を加へ置きたり。

●書中（ ）内に在る文字は、原本に細字にて註書せるもの、又（ ）内に在る文字は、譯者の附け加へたるものなり。

●若夫れ本書に依て、眞面目に我國上古の國性、制度、風俗、習慣等を研究し、因て以て國民將來の發展に資する事を得んか、譯者の望み足れり。豈啻だも伽話の材料を提供するのみと謂はんや。

明治四十四年四月

譯者しるす

標 今文古事記目次

上卷—神代の卷

- 天地の初め.....一
- 國生み.....二
- 大八島國.....四
- 神生み.....六
- 黄泉國.....一
- 青人草.....三
- 禊祓.....四
- 天照大御神.....一六
- 速須佐之男命の追放.....一八
- 天石屋戸籠り.....二三
- 石戸開き.....二五
- 八岐の蛇.....二八
- 草薙劍.....二九

八重垣の歌	三〇
大國主神	三一
白菟	三二
八上比賣	三四
須勢理毘賣	三五
沿河比賣	三九
少名毘古那神	四八
山田の曾富騰	四九
水穗國の鎮定	五一
雉のひたづかひ	五三
建御雷之男神	五七
天忍穗耳命の降臨	六一
猿田毘古神	六二
内宮外宮	六三
木花佐久夜毘賣	六六
海佐知山佐知	六八

中卷

鹽滿珠鹽乾珠	七四
鵜茅草葺不合命	七七
神武天皇の朝	七九
綏靖天皇の朝	九六
安寧天皇の朝	九六
懿德天皇の朝	九七
孝照天皇の朝	九八
孝安天皇の朝	九九
孝元天皇の朝	一〇一
開化天皇の朝	一〇三
崇神天皇の朝	一〇六
垂仁天皇の朝	一一四
景行天皇の朝	一二七
成務天皇の朝	一四七
仲哀天皇の朝	一四八

下卷

應神天皇の朝……………一五七

仁徳天皇の朝……………一七九

履中天皇の朝……………一九七

反正天皇の朝……………二〇二

允恭天皇の朝……………二〇二

安康天皇の朝……………二一一

雄略天皇の朝……………二一七

清寧天皇の朝……………二二三

顯宗天皇の朝……………二三九

仁賢天皇の朝……………二四三

武烈天皇の朝……………二四四

繼體天皇の朝……………二四四

安閑天皇の朝……………二四六

宣化天皇の朝……………二四七

欽明天皇の朝……………二四七

敏達天皇の朝……………二四九

用明天皇の朝……………二五〇

崇峻天皇の朝……………二五一

推古天皇の朝……………二五一

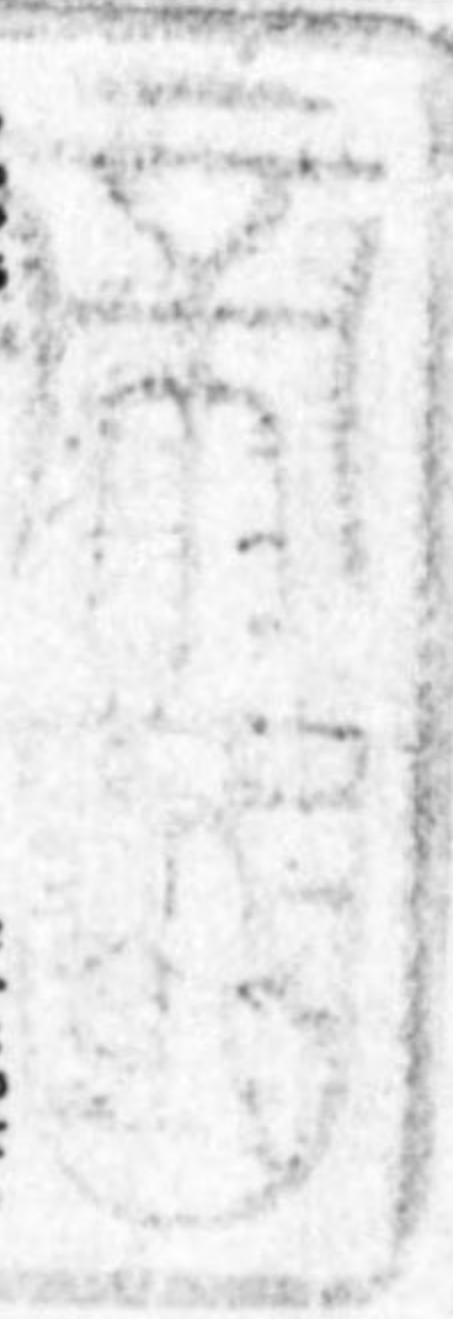
標註 今文古事記 上卷——神代の卷——

池田常太郎譯註

〔天地の初め〕

△高天原 天なり

△葦牙 葦の牙の如く
ズン／＼と生い立つ物



天地の初めの時、高天原たかまのほらに生れ出でたまへる神の名は、天之御中あめのみなか主神ぬしのかみ。次に、高御産巢日神たかみむすひの、次に、神産巢日神かみむすひの。此の三神は、皆みなな獨神ひとがみにして、身を隠したまふ。次に、國稚くにわかく、浮脂うきあぶらの如くして海月うみづきの如く漂たぐよへる時に、葦牙あしかびの如く、萌え騰あがる物に因りて、生れうまたまへる神の名は、宇麻志阿斯訶備比古遲神うまさあしかびひこぢの。次に、天之常立神あめのとこたちの。此の二神も獨神にして、身を隠したまへり。

右五神は、別天神なり

次に、生れたまへる神の名は、國之常立神くにのとこたちの。次に、豊雲野神とよぐもぬの。此

△妹 女の稱

の二神も、獨神にして、身を隠したまふ。次に、生れたまへる神の名は、宇比地邇神。次に、妹須比智邇神、次に、角杙神。次に、妹活杙神。次に、意富斗能地神。次に、妹意富斗乃辨神。次に、淤母陀琉神。次に、妹阿夜訶志古泥神。次に、伊邪那岐神。次に、妹伊邪那美神。

右、國之常立神より以下、伊邪那美神まで、并せて、神世七代と稱す、(上の二神は、獨神、各、一代と云ひ、次に、雙びて生れたまへる十神は、各、二神を合せて一代と云ふ)。

是に於て天神の詔命により、伊邪那岐命、伊邪那美命、二神に是の多陀用幣琉國を、修理固めなせと詔りして、天沼矛を賜ひて、任命し賜ふ、故に、二神、天浮橋に立ちて、其の沼矛を指し下して、畫きたまへば、鹽、許袁呂許袁呂に攪さまはして、引上げたまふ

〔國生み〕

△天沼矛 玉を以て飾れる矛
△天浮橋 天と地との間に浮べる橋の名
△鹽許袁呂許袁呂に云々 海の潮をコロコロ

と攪さまはし給ひての意

△淤能基呂島 淡路國の西北隅の海中にあり。今は同國津名郡に屬す
△八尋殿 廣く大きな御殿を云ふ

△天之御柱を行廻り逢ひ八尋殿の中央なる天の御柱を二神互に廻りて行きあひ給ふなり
△美斗能麻具波比 男
△交接するを云ふ
△阿那邇夜志愛袁登古

時に、其の矛の末より、垂る鹽、積りて島となる。是れ淤能基呂島なり。其の島に天降りて、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまふ。是に於て、其の妹伊邪那美命に、汝が身は如何に成れると問ひたまへば、吾が身は、成り成りて、成り合はざる處一處ありと答へたまふ。伊邪那岐命。詔りたまはく。我が身は成り成りて、成り餘れる處、一處あり。故に此の吾が身の成り餘れる處を、汝が身の成り合はざる處に刺し塞ぎて、國土を生み成さむと思ふは奈何と曰ひたまへば、伊邪那美命、其は善しからむと答へたまふ。爾に、伊邪那岐命、然らば、吾と汝と、是の天の御柱を行き廻り逢ひて。美斗能麻具波比せむと詔りたまへり。此く云ひて、乃ち、汝は、右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむと曰ひたまひ、約竟へて、廻ります時に、伊邪那美命、先づ、阿那邇夜志、

袁 俗にア、ウツクシイ、ヨイ男ヨと云ふにおなじ

△久美度 夫婦隠れ寝る所、興しは交合することなり

△淡島 讃岐屋島の北にあり

〔大八島國〕

△布斗麻邇 太占なり

愛袁登古袁と言ひたまひ、後に、伊邪那岐命、阿那邇夜志、愛袁登賣袁と言ひたまふ、各言ひ竟りて後に、其の妹に、女を、言先だたせしは、不詳なりと曰ひたまふ。然れども久美度に興して、子、水蛭子を生みたまふ。此の子は、葦船に入れて流し去り。次に淡島を生みたまふ。是も、子の數には入らず。是於て二神、議りて云ひたまはく。今、吾が生みし子、不詳なり。猶、天神の御所に白すべしと、即ち、共に参りて天神の命を請ひたまふ。爾に、天神の命を以ちて。布斗麻邇にトひ合はて、詔りたまはく。女を言先だたし、に因りて不詳なり。亦、還り降りて改めて言へと。乃ち、反り降りて、更に、其の天の御柱を先の如く、往き廻りたまふ。是に於て、伊邪那岐命、先づ、阿那邇夜志、愛袁登賣袁と言ひたまひ。後に、妹伊邪那美命、阿那邇夜志、愛

△淡路之穂之狭別島 今の淡路なり

△二名島 今の四國なり

△身一にして面四有り 一の島にして四ヶ國に分れ居るを云ふ

△粟國 阿波
△土佐國 土佐
△筑紫國 筑紫、豊國、肥國、熊曾の四ヶ國の總稱。後に筑前筑後豊前豊後肥前肥後日向大隅薩摩の九ヶ國となる。即ち今の九州なり。△筑紫國 今の筑前筑後の二國なり。前の總稱に筑紫とあるとは別なり。△豊國 豊前豊後
△肥國 肥前肥後の二國及び日向の北方半分の。△日向の南方半國は今の日向の南方半國に

袁登賣袁と言ひたまふ。此て言ひ竟りて、御合して、子、淡道之穂之狭別島を生みたまふ。次に、伊豫の二名島を生みたまふ。此の島は、身一にして、面四つあり。面毎に名あり。故に、伊豫國を、愛比賣と謂ひ讃岐國を、飯依比古と謂ひ、粟國を、大宜都比賣と謂ひ。土佐國を、建依別と謂ふ。次に、隱伎の三子島を生みたまふ。亦の名は天之忍許呂別。次に筑紫島を生みたまふ。此の島も、身一つにして、面四つあり。面毎に名あり。故に、筑紫國を、白日別と謂ひ、豊國を豊日別と謂ひ、肥國を、建日向日豊久士比泥別と謂ひ、熊曾國を、建日別と謂ふ。次に、伊伎島を生み給ふ。亦の名は、天比登都柱と謂ふ。次に、津島を生み給ふ。亦の名は天之狭手依比賣と謂ふ。次に佐渡島を生み給ふ。次に、大倭豊秋津島を生み給ふ。亦の名は、天御虚空豊秋津根別と謂ふ。此

かりより大隅薩摩の地
 までの總名△伊伎島
 壹岐△津島△大倭島△佐
 津島△佐波△長門の豊秋
 より陸奥の末まで一帯
 に連れる大陸をいふヤ
 マトと云ふ稱はもと畿
 内なる大和國の名な
 りしが後轉じて日本全
 國の總稱となれり△大
 八島國七道の總稱
 にて我が國の古名なり

〔神生み〕

の八島は、先づ、生みたまへる國なるに因りて、大八島國と謂ふ。
 然る後、還りまし、時に、吉備の兒島を生みたまふ。亦の名は、
 建日方別と謂ふ。次に、小豆島を生みたまふ。亦の名は、大野手
 比賣と謂ふ。次に、大島を生みたまふ。亦の名は、大多麻流別と
 謂ふ。次に、女島を生みたまふ。亦の名は、天一根と謂ふ。次に、
 知訶島を生みたまふ。亦の名は、天之忍男と謂ふ。次に、兩兒島
 を生みたまふ。亦の名は、天兩屋と謂ふ。(吉備の兒島より、天兩
 屋島まで、併せて六島。)
 全く、國を生み竟りて、更に、神を生む。生みませる神の名は、
 大事忍男神。次に、石土毘古神を生み、次に、石巢比賣神を生み、
 次に、大戸日別神を生み、次に、天之吹男神を生み、次に、大屋
 毘古神を生み、次に、風木津別之忍男神を生み、次に、海の神、

△小豆島 讚岐寒川郡
 △大島 周防大島郡
 △女島 豊後國崎郡
 △智訶島 肥前松浦郡
 △兩兒島 今の北海道

△水戸 港に同じ

△山野に因りて持別けて
大山津見神は山を

名は、大綿津見神を生み、次に、水戸の神、名は、速秋津日子神、
 次に、妹速秋津比賣神を生みたまふ。(大事忍男神より、秋津比賣
 神まで、併せて十神)。此の速秋津日子、速秋津比賣、二神、河海に
 因りて、持ち別けて、生みませる神の名は、沫那藝神。次に、沫
 那美神。次に、頬那藝神。次に、頬那美神。次に、天之水分神。
 次に、國之水分神。次に、天之比奢母智神。次に、國之久比奢母
 智神。(沫那藝神より、國之久比奢母智神まで、併せて八神)。次に、
 風の神、名は、志那都比古神を生み。次に、木の神、名は、久久
 能智神を生み、次に、山の神、名は、大山津見神を生み、次に、
 野の神、名は、鹿屋野比賣神を生む、亦の名は、野椎神と謂ふ。
 (志那都比古神より、野椎まで、併せて四神)。此の大山津見神、
 野椎神、二神、山野に因りて、持ち別けて、生みませる神の名は、

掌り野椎神は野を掌り
各受持の地を定めてと
いふ意なり

△美蕃登 陰門なり男
女を通じて云ふ
△多具理 嘔吐

天之狹土神。次に、國之狹土神。次に、天之狹霧神。次に、國之
狹霧神。次に、天之關戸神。次に、國之關戸神。次に、大戸惑子
神。次に、大戸惑女神。(天之狹土神より、大戸惑女神まで、并
せて、八神)。次に、生みませる神の名は、鳥之石楠船神。亦の名
は、天之鳥船と謂ふ。次に、大宜都比賣神を生み、次に、火之夜
藝速男神を生む。亦の名は、火之炫毘古神と謂ひ、亦の名は、火
之迦具土神と謂ふ。此の子を生みますすに因り、美蕃登炙れて、病
臥せり。多具理に、生れたまへる神の名は、金山毘古神。次に、
金山毘賣神。次に、尿に生れたまへる神の名は、波邇夜須毘古神。
次に、波邇夜須毘賣神。次に尿に生れたまへる神の名は、彌都波
能賣神。次に、和久産巢日神。此の神の子を、豊宇氣毘賣神と謂
ふ。伊邪那美神は。火の神を生みませるに因りて、遂に神避りた

△愛しき我那邇妹命や
俗に可愛の我が妻よ
と云ふが如し

△香山 大和國十市郡
△畝尾木本 同上
△伯伎國 伯耆
△十拳劍 劍の身の長
さの十握ほごあるを云
ふ

まへり。(天鳥船より、豊宇氣毘賣神まで、並せて八神)。
凡て、伊邪那岐、伊邪那美、二神、共に生みたまへる鳥、十四
鳥、神、三十五神。(是は伊邪那美神、未だ神避り給はざりし
以前に生み給へり、唯、意能基呂島のみは生みまたふにあらず、
亦、蛭子と淡島とも子の數に入らず)。
爾に、伊邪那岐命、詔りたまはく。愛しき、我が那邇妹の命や、
一人の子の爲に失はれつるかもと謂ひたまひて、御枕方に匍匐ひ、
御足方に匍匐ひて、哭きたまふ時に、御涙に生れたまへる神は、
香山の畝尾の木本にあり、名は泣澤女神。其の神避りまし、伊邪
那美神は、出雲國と伯伎國との堺、比婆の山に葬りまつれり、是
に於て伊邪那岐命、御佩せる十拳劍を抜きて、其の子、迦具土の
神の頸を斬りたまふ。其の御刀の前に著ける血、湯津石村に走り

就きて、生れたまへる神の名は、石析神。次に、根析神。次に石筒之男神。次に、御刀の本に著ける血も、湯津石村に走り就きて、生れたまへる神の名は、甕速日神。次に、樋速日神、次に、建御雷之男神。亦の名は、建布都神。亦の名は、豊布都神。次に、御刀の柄に集まる血、手俣より漏り出て、生れたまへる神の名は、闇淤加美神。次に、闇御津羽神。

右、石拆神より以下、闇御津羽神まで、並せて八神は、御刀に因りて生れ給へる神なり。

殺されまし、迦具土の神の頭に生れたまへる神の名は、正鹿山津見神。次に、胸に生れたまへる神の名は、淤藤山津見神。次に、腹に生れたまへる神の名は、奥山津見神。次に、陰に生れたまへる神の名は、闇山津見神。次に、左の手に生れたまへる神の名は、

●●●
〔黄泉國〕

△黄泉國 死人の往く所
△騰戸 下より押上ぐる戸

△那勢 我夫

志藝山津見神。次に、右の手に生れたまへる神の名は、羽山津見神。次に、左の足に生れたまへる神の名は、原山津見神。次に、右の足に生れたまへる神の名は、戸山津見神。（正鹿山津見神より戸山津見神まで、並せて八神）。斬りたまへる刀の名は、天之尾羽張と謂ひ、亦の名は、伊都之尾羽張と謂ふ。

是に於て其の妹。伊邪那美命を相見むと欲ひて、黄泉國に追ひ往きたまふ。爾ち、殿の騰戸より、出向へます時に、伊邪那岐命、語らひたまはく。愛しき我が那邇妹の命、吾、汝と作れりし國、未だ、作り竟へずあれば、還りたまふべしとのりたまへり。伊邪那美命、答へたまはく。悔しきかも。速く來まさざりしにより、吾は、黄泉國の竈にて、煮きたるものを食へり。然れども、愛しき我が那勢の命、入り來坐せる事、恐れ多ほければ、還りなむを、

△御美豆良 髪を左右に分けて角の如く結び束ねたるものにて上古の男装

△豫母都志許賣 夜見國に居る醜き邪神

且く黄泉神と論らばむ。我を視たまふことなかれ。此く白して、其の殿内に還り入りませる間、甚だ久しくて、待ちかねたまへり。故に左の御美豆良に刺せる、湯津津間櫛の男柱一箇取り闕きて、一火を燭して入り見ます時に、蛆たかり、とろゝぎて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には拆雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、並せて八の雷神生れ居れり。是に於て伊邪那岐命、見て畏ろしく思ひ、逃げ返ります時に、其の妹、伊邪那美命、吾に辱見せたまひたりと言ひて、即ち、豫母都志許賣を遣はして、追はしめたり、伊邪那岐命、黒御鬘を取りて、投げ棄てたまひしかば、乃ち、蒲子生れり、是を拾ひ食む間に、逃げ行きたまふを、猶ほ、追ひしかば、亦、其の右の御美豆良に刺せる、

△黄泉比良坂 出雲國の伊賦夜坂

●●●「青人草」

△葦原中國 日本國の古名
△青人草 國民の増加する状を草の茂り行くに喩へたるなり

湯津津間櫛を引き闕きて投げ棄てたまひしかば、乃ち、筭を生ず。是を抜き食む間に、逃げ行きたまふ。且、後には、其の八の雷神に、千五百の黄泉軍を副へて、追はしめたり、爾に、御佩せる十拳劔を抜きて、後に振りつゝ逃げ來ませるを、猶、追ひて、黄泉比良坂の坂本に到る時に、其の坂本なる桃子を三つ取りて、待ち撃ちたまひしかば、悉く逃げ返れり。伊邪那岐命、桃子に告りたまはく。汝、吾を助けしが如く、葦原中國に有らゆる、眼のあたりなる青人草の苦しみに落ちて思まむ時に助けてよ、と告りたまひて、意富加牟豆美命といふ名を賜へり。最後に、其の妹邪那美命、身自ら追ひ來ませり。爾ち、千引石を其の黄泉比良坂に塞ぎ、其の石を中に置き、相對立して、夫婦の契を絶つ誓ひを立てたまふ時に、伊邪那美命言ひたまはく。愛し

我が那勢命、此く爲たまはゞ、汝國の人草、一日に千人を絞り殺さむ。伊邪那岐命、詔りたまはく、愛しき我が那邇妹命、汝、然爲たまはゞ、吾は、一日に千五百の人を産み出ださむ。是を以て、一日に必ず、千人死に、一日必ず、千五百人生る。故に、伊邪那美命を、黄泉津大神と謂ふ。亦、其の追斯伎斯によりて、道敷大神と號くと云へり。亦、其の黄泉坂に塞がりし石は、道反大神とも號け、塞坐黄泉戸大神とも謂ふ。故に其の所謂、黄泉比良坂は、今、出雲國の伊賦夜坂と謂ふ。

△伊那志許米 嫌に穢
 △笠紫日向之橋小門之
 阿波岐原 筑紫の内之
 日向と云ふ地の橋とい
 ふ所の小き水門のミ
 ソ萩の生えたる原をい

是を以て伊邪那岐大神詔りたまはく。吾は、伊那志許米、志許米岐穢き國に到りをり。故に、吾は、御身の禊せむとのりたまひて、笠紫日向の橋小門の阿波岐原に到りて、禊ぎ祓ひたまふ。投げ棄つる御杖に生れ給へる神の名は、衝立船戸神。次に、投げ棄つる御帯に生れ給へる神の名は、道之長乳齒神、次に、投げ棄つる御裳に生れ給へる神の名は、時置師神。次に、投げ棄つる御衣に生れ給へる神の名は、和豆良比能宇斯能神。次に、投げ棄つる御禪に生れ給へる神の名は、道俣神、次に、投げ棄つる左の御手の手纏に生れ給へる神の名は、奥疎神、次に、奥津那藝佐毘古神。次に、奥津甲斐辨羅神。次に、邊疎神、次に、邊津那藝佐毘古神。次に、邊津甲斐辨羅神。

△手纏 玉なごを緒に
 買きて手の節に纏へる
 物なり

右、船戸神より以下、邊津甲斐辨羅神まで、十二神は身に著ける物を脱ぎ棄てたまひしに因りて、生れ給へる神なり。是に於て、川上は瀬急し、川下は瀬緩しと詔りたまひて、初めて中流に下り水中に入りて、滌ぎたまふ時に、生れ給へる神の名は、

八十禍津日神。次に、大禍津日神。此の二神は、其の穢き醜國に到りまし、時の、汚れに因りて、生れ給へる神なり。次に、其の禍を直さむとして、生れ給へる神の名は、神直日神、次に、大直日神、次に伊豆能賣神（並せて三神なり）。次に、水底に滌ぎたまふ時に、生れ給へる神の名は、底津綿津見神。次に、底筒之男命。中に滌ぎたまふ時に、生れ給へる神の名は、中津見綿津見神。次に、中筒之男命。水の上に滌ぎたまふ時に、生れ給へる神の名は、上津綿津見神、次に、上筒之男命。此の三の綿津見神は、阿曇連等が祖神として、齋き祭る神なり。故に阿曇連等は。其の綿津見神の子、宇津志日金拆命の子孫なり。其の底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命、三つの神は、墨江の三座の大神なり。是に於て、左の御目を洗ひたまひし時に、生れ給へる神の名は、天照大御神。

△阿曇連 海人を監督ある部族の長

△墨江 攝津菟原郡の住吉

〔天照大御神〕

次に。右の御目を洗ひたまひし時に、生れ給へる神の名は、月讀命。次に、御鼻を洗ひたまひし時に生れ給へる神の名は、建速須佐之男命。

右、八十禍津日神以下、速須佐之男命まで、十四神は、御身を滌ぎたまふに因りて、生れ給へる神なり。

此の時、伊邪那岐命、大いに喜びて詔りたまはく。吾は、子、生みくして、生みの終りに、三つの尊く優れたる子を得たりと。即ち、其の御頸珠の玉緒を、ゆらくと、手に取り振り揺かして、天照大御神に賜ひて、詔たまはく。汝が命は、高天原を領せと任命し賜ふ。故に、其の御頸珠の名を、御倉板舉之神と謂ふ。次に、月讀命に詔りたまはく、汝が命は、夜の食國を領せと、任命したまふ。次に、建速須佐之男命に詔りたまはく。汝が命は、海

△夜の食國 月界なり

△海原 ことにては海
外の諸國をも含む

「速須佐之男命の
追放」

△八拳鬚 長き鬚

△妣國云々 母伊佐那
美命のある根の片隅國
にて黄泉國の事なり

原を領せと、任命したまへり。

故に、各、委任せられたる命に隨ひて、領しめす中に、速須佐之男命、命せられたる國を治めずて、八拳鬚心前に至るまで、足摩して忿り泣き、其の泣きたまふ状は、青山を枯山の如く、泣き枯し、海河は、悉く泣き乾す。是を以て、邪神の荒れ騒ぐ音、蠅の涌き起つが如く、萬の物の妖、悉く發る。故に、伊邪那岐大御神、速須佐之男命に詔りたまはく。何の故に、汝は命せられたる國を治めずして、忿り哭くぞと、のりたまへば、答へて曰く、僕は、妣の國、根の堅洲國に往むと欲ふが故に、哭くとまをしたまふ。爾に、伊邪那岐大御神、大いに忿怒りて、然らば、汝、此の國には、住むなと詔りたまひて、乃ち、追ひ放したまふ。伊邪那岐大御神は、淡海の多賀に坐しませり。

△八尺勾聽 五百津之美
須麻流之珠 極美麗な
る勾玉を數多緒に貫き
連れたる鞆の千本
も入るべき鞆といふ意
△弓腹振立て 弓の末
を振り立てるなり
△堅庭は 向股に踏な
み入るべき地に御足を踏
み入るべき意にて力の踏
強きさま也

是に於て速須佐之男命言ひたまはく。然らば、天照大御神に御暇乞ひして往むとまをしたまひて、乃ち、天に上りまたまふ時に、山川、悉く動み、國土、皆震ふ。爾に、天照大御神、聞き驚きて、我那勢命の上り來ます所以は、必ず、善き心ならじ、我が國を奪はむと欲ふならんと詔り給ひて、即ち、御髪を解き、御美豆羅に纏きて、左右の御美豆羅にも、御鬘にも、左右の御手にも、各、八尺勾聽の、五百津の美須麻流の珠を佩びて、背には、千入の鞆を負ひ、五百入の鞆を付け、亦、稜威の竹鞆を取り佩きて、弓腹振り立て、堅庭は、向股に踏みなづみ、沫雪の如く、蹶散らして、稜威の男建び踏み建びて、待ち問ひたまはく。何故に、上り來たると、とひたまふ。爾に、速須佐之男命答へたまはく。僕は、邪き心なし。唯、大御神の命を以ちて、僕が哭き忿れる事を問ひ賜

ひし故に、白しつらく、僕は、妣の國に往かむと欲ひて、哭くと
 まをし、かば、大御神、汝は、此の國には、往むなと詔りたまひ
 て、追ひ放し賜ふ故に、往かむとする狀を請さむと思ひて、參り
 たり。異心なしとまをしたまへば、天照大御神、然らば、汝の心
 の清く明らかなることは、何を以て知らむと詔りたまへり。是に
 於て、速須佐之男命、各、誓ひて、子を生まむと答へたまふ。爾
 に各、天安河の中に置きて、誓ふ時に、天照大御神、先づ、速須
 佐之男命の佩ける、十拳劍を乞ひ取りて、三段に打折りて、奴那
 登母由良に、天之眞名井に振り滌ぎて、齧みに齧みて、吹き棄
 つる氣吹の狭霧に、生れ給へる神の御名は、多紀理毘賣命。亦の
 御名は、奥津島比賣命と謂ふ。次に、市寸島比賣命。亦の御名は
 狭依毘賣命と謂ふ。次に、多岐津比賣命。速須佐之男命、天照大

△天安河 天上にある
 河
 △奴那登母云々 ゆら
 くといふ意
 △天之眞名井 天上に
 ある井戸

△氣吹 口より噴き出
 す息

御神の、左の御美豆良に纏ける、八尺勾摠の、五百津の美須麻流
 珠を乞ひ取りて、奴那登母由良に、天之眞名井に振り滌ぎて、
 齧みに齧みて、吹き棄つる氣吹の狭霧に、生れ給へる神の御名は
 正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命。亦、右の御美豆良に纏ける珠を乞
 ひ取りて、齧みに齧みて、吹き棄つる、氣吹の狭霧に、生れ給へ
 る神の御名は、天之菩卑能命、亦。御鬘に纏ける珠を乞ひ取りて
 齧みに齧みて吹き棄つる氣吹の狭霧に、生れ給へる神の御名は、
 天津日子根命。又、左の御手に纏ける珠を乞ひ取りて、齧みに齧
 みて、吹き棄つる氣吹の狭霧に、生れ給へる神の御名は、活津日
 子根命。亦、右の御手に纏ける珠を乞ひ取りて、齧みに齧みて、
 吹き棄つる氣吹の狭霧に、生れ給へる神の御名は、熊野久須毘
 命。(并せて五神)

△胸形之奥津宮、中津宮、邊津宮、奥津宮は筑前國宗像郡田島村上殿鎮座。中津宮は同郡人島村大岸鎮座。奥津宮は同郡沖島鎮座。奥津宮は官幣中社宗像神社なり

△出雲國造 出雲國の國造なり國造とは一國を治むる職

是に於て天照大御神、速須佐之男命に告りたまはく。是の後に生れ給へる五の男子は、素と、我が物に因りて生れたり、故に自ら吾が子なり。先に生れ給へる三の女子は、素と、汝の物に因りて生れたり。故に、汝の子なり。此く辨別けたまへり。其の先きに生れ給へる神、多紀理毘賣命は、胸形之奥津宮にあり。次に、市寸鳥比賣命は、胸形之中津宮にあり。次に、田寸津比賣命は、胸形之邊津宮にあり。此の三神は、胸形君等が、齋さ祭れる、三座の大神なり。此の後に生れ給へる、五子の中に、天菩比命の子、建比良鳥命。(此は出雲國造、無邪志國造、上菟上國造、下菟上國造、伊自牟國造、津島縣直、遠江國造等の祖なり。)次に、天津日子根命。(凡河内國造、額田部湯坐連、茨木國造、倭田中直、山代國造、馬來田國造、道尻岐閉國造、周芳國造、倭淹知造、高市

〔天石屋戸籠〕

△詔直 惡き事をも善きやうにいひ直すことなり
△忌服屋 御衣を織る殿舎
△斑馬 毛の斑なる馬

縣主、蒲生稻寸、三枝部造等の祖なり)。爾に、速須佐之男命、天照大御神に白したまはく。我が心清く明らかなるが故に、我が生みし子、手弱女を得たり。此に因りて言へば、自ら、我、勝てりと云ひて、勝ちに乗じて荒れて、天照大御神の、營田の畔を壊ち、溝を埋め、亦、其の大嘗と稱へて新穀を饗したまふ宮殿に、尿をまり散したり。然すれ共天照大御神は、尤めずして、告りたまはく。尿の如きは、酔ひて吐き散らしたる物にて、我が那勢の命、此く爲つらめ。又、田の畔を壊ち、溝を埋むるは、地を惜しと思ひて、我が那勢の命、此く爲つらめと、詔直したまへども、猶ほ、其の惡しき態、止まらずして愈々甚だし。天照大御神、忌服屋に坐しまして、神に献つる御衣を織らしめたまふ時に、其の服屋の棟を穿ちて、天斑馬を逆か劔に劔ぎ

△尻久米繩 今の志米

△千位置戸 罪ある人の出す數多の祓の物を居みおく臺
△又食物を 以下の一節は行文にて此處に入るべきものならねば假

歌舞音樂をなし、亦、八百萬の神どもは、咲ふぞとのりたまふ。爾ち、天宇受賣、汝が命に優りて、貴き神、坐すが故に、歡喜咲樂せりと言へり。かく言ふ間に、天兒屋命、布刀王命、其の鏡を指し出して、天照大御神に示し奉る時に、天照大御神、逾奇しと思ひて、稍や戸より出で、臨みます時に、隠れ立ちたる、天手力男命、其の御手を取りて引出したり。即ち、布刀玉命、尻久米繩を、其の後方に引き渡して、此より内に、還り入りたまふと言へり。故に天照大御神、出でませる時に、高天原も、葦原中國も、自ら照り明らかになれり。是に於て八百萬の神、共に議りて、速須佐之男命に、千位置戸を負はせ、亦、鬚を切り、手足の爪をも抜かしめて、高天原を追ひ放ちたまへり。〔又、食物を、大氣津比賣神に乞ひたまふ。大氣都

りに〇印を附して之を示す

△肥河 大原郡斐伊河
△鳥髮 仁多那鳥上山の邊

△國神 天神に對して云ふ

比賣、鼻口、及尻より、種々の味よき物を取り出して、種々に作りて、進むる時に、速須佐之男命、其の態を立ち伺ひて、穢なきものを進め奉ると爲して、乃ち、其の大宜津比賣神を殺したり。殺されたまへる神の、身に生れる物は、頭に蠶生り、二の目に稻種生り、二の耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麥生り、尻に大豆生れり。神産巢日御祖命、これを取りて、種と成し賜ふ。〕追ひ放たれて。出雲國の肥河上なる、鳥髮の地に降りたまへり。此の時、箸、其の河より流れ下れり。是に於て須佐之男命、其の河上に人ありと思ひ、尋ねて上り往きたまへば、老夫と老女と、二人ありて、童女を中に置きて泣くなり。汝等は誰ぞと問ひ賜へば、其の老夫、僕は、國神、大山津見神の子なり。僕が名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣と謂へりと答ふ。亦、汝は何故

〔八岐の蛇〕

△高志 出雲神門郡

に哭くぞと問ひたまへば、我が女は、もと八人ありしが、是に、高志の八俣遠呂智ありて、年毎に來て喫ふなり。今其の來るべき時なるが故に泣くと答へたり。其の形は如何にと問ひたまへば、彼が目は赤加賀智の如く、身一つに、頭八つ、尾八つあり。亦、其の身に蘿、及、檜生え、其の長さ、谿八谷、峽八尾を渡りて、其の腹を見れば、悉く、常に、血にて爛れたりと答ふ。（此に赤加賀智といへるは、今の酸漿なり）爾に、速須佐之男命、其の老夫に、是れ、汝の女ならば、吾に奉らずやと語りたまふに、恐れ多けれど、御名を知らずと答へしかば、吾は、天照大御神の弟なり。故に今、天より降りたりと答へたまふ。足名椎、手名椎神、然れば奉らむと云ふ。速須佐之男命、乃ち其の童女を湯津爪櫛と稱ふる、齒のこまかき櫛に、化らせて、御髻に刺し、足名椎、手

△八鹽折 八度造り

△都牟刈之太刀 銳利なる大刀をほめたる稱

〔草薙劔〕

名椎神に告げたまはく。汝等、八鹽折の酒を造り、且、垣を作り廻らし、其の垣に、八の門を作り、門毎に、八の棧敷を結ひ、其の棧敷毎に、酒船を置きて、船毎に、其 八鹽折酒を盛りて、待ち居れよと云ひたまふ。故に、告げたまへる隨に、設けなして待つ時に、其の八俣遠呂智、信に、言しが如く來れり。乃ち船毎に、己もく、頭を垂れて、其の酒を飲む。是に於て、飲み酔ひて、留り伏し寝たり。爾ち、速須佐之男命、其の佩ぶる所の十拳劔を抜きて、其の蛇をずだくに斬りたまひしかば、肥河、血に變りて流る。其の中の尾を斬りたまふ時、御刀の刃毀れたり。怪しと思ひて、刀の前きを以て、刺し割きて見たまへば、都牟刈の大刀ありたり、此の大刀を取りて、異しき物ぞと思ひ、天照大御神に白し上げたまふ。是即ち後の草那藝の大刀なり。

△須賀々々 サツバリ

△須賀宮 大原郡海湖村

〔八重垣の歌〕

やくもたつ 出雲の枕
詞△いづもやへがき
たのぼる雲の重りて
圍のかほひの衣垣の如
くみなるをいふ△つま
ごみに△夫婦こもるた
めその意△やへがきつ
くるそのやへがきなつ
やへがきなは彌重垣よ
の意にて嘆辭

是を以て、速須佐之男命、宮を造るべき地を、出雲國に求めたまふ。須賀の地に到り、吾、此地に來りて、我が心須賀須賀しとのりたまひて、其地に、宮を作りて坐しませり。故に、其地を、今に須賀といふ。茲の大神、初め、須賀宮を作る、時に、其地より雲立ち騰れり。其の時、作りたまひし歌は。

八雲起つ 出雲八重垣
夫妻隠に 八重垣造る
其の八重垣を

是に於て足名稚神を喚びて、汝は、我宮の首たれと告げ、且つ名を、稻田宮主須賀之八耳神と附けたまふ。櫛名田比賣を以て久美度に起して、生み給へる神の名を、八島士奴美神と謂ふ、又大山津見神の女、名は神大市比賣を娶りて、子、大年神。次に、

〔大國主神〕

△稻羽 因幡

△婚ばむ 婚姻したき

宇迦之御魂神を生みたまふ。兄、八島士奴美神、大山津見神の女名は木花知流比賣を娶りて、生み給へる子、布波能母遅久奴須奴神。此の神、淤迦美神の女、名は日河比賣を娶りて、生み給へる子、深淵之水夜禮花神。此の神、天之都度閉知泥神を娶りて、生み給へるは、淤美豆奴神。此の神、布怒豆怒神の女、名は布帝耳神を娶りて、生み給へる子、天之冬夜神。此の神、刺國大神の女名は刺國若比賣を娶りて、生みませる子、大國主神。亦の名は、大穴牟遲神、亦の名は、葦原色許男神、亦の名は、八千矛神、亦の名は、宇都志國玉神と謂ふ。并せて五つの名あり。

此の大國主神の兄弟、八十神あり。然れども、皆、國は大國主神に譲りまつれり。譲りまつりし所以は、其の八十神、各、稻羽之八上比賣を婚ばむとの心有りて、共に稻羽に行きける時に、大穴

△氣多之崎 因幡國氣多郡の海邊

〔白兔〕

△裸なる兔 毛のなき兔

△淤岐島 隱岐國此地 因幡
△和邇 鰐魚

牟遲神に、帛を負はせ、從者として、率れ往けり、氣多の崎に到れる時に、裸なる菟伏せり。八十神、其の菟に向つて曰く。汝、此の海鹽を浴み、風の吹くに當りて、高山の尾上に伏せよといふ、菟、八十神の教ふるまゝに、伏したり、其の鹽の乾くに隨がひ、身の皮、悉く風に吹き折れし故に、痛みて、泣き伏しければ、最後に來れる大穴牟遲神、其の菟を見て、何故、汝、泣き伏せるやと言ひたまふに、菟答へて曰く。僕、淤岐島に在りて、此の地に渡らむと思ひたれども、渡らむよし無かりし故に、海のと邇を欺きて言く、吾と汝と、一族の多き少きを競べむ。汝は、其の一族を悉く率れ來りて、此の島より、氣多崎まで、皆、列伏し渡れ。吾、其の上を踏みて、走りつゝ、數をかぞへて渡らむ、是に於て、吾が一族と孰れが多きといふことを知らむ。かく言ひしかば、欺

△我が衣服 毛皮

△帛を負ひたまへ共從者となりて袋を背負

かれて列伏したる時に、吾、其の上を歩みて、數へ渡り來て、今地に下りむとする時に、吾、汝は我に欺かれたると言ひ竟れば、即ち、最も端に伏せる和邇、我を捕へて、悉く、我が衣服を剝ぎたり。此に因りて、泣き患ひしかば、先に行きたる、八十神の命海鹽を浴みて、風に當り伏せれと誨へたまへり。故に教の如くせしかば、我が身、悉く、傷ひたりと云ふ。大穴牟遲神、其の菟に教へたまはく。今急く、此の水門に往きて、水を以て汝が身を洗ひ、其の水門の蒲黃を取りて、敷き散らして、其の上に轉ばせ、汝が身、本の膚の如く、必ず、癒えむと教へたまふ。故に、教への如く爲しかば、其の身、本の如くになれり。此れ稻羽の素菟といふ者なり。今に、菟神と謂ふ。其の菟、大穴牟遲神に曰へるに。此の八十神は、必ず、八上比賣を得たまはじ。帛を負ひたま

ひ賤しきさまに見え給へどもの意

〔八上比賣〕

△伯伎 伯耆

へども、汝が命は獲たまはむと云へり。
是に於て、八上比賣、八十神に答へて曰く。吾は、汝等の言は聞かじ、大穴牟遲神に嫁がむと、故に、八十神怒りて、大穴牟遲神を殺さむと、共に議りて、伯伎國手間山下に至りて云く、此の山に赤猪あり。我等、追ひ下りたらば、汝待ち取れ。若し待ち取らずは、必ず、汝を殺さむと云ひて、猪に似たる一石を火を以つて焼きて轉し落したり。追ひ下り、取る時に、其の石に焼著きて死にたり。爾に、其の御祖の命、哭き患ひて、天に上りて、神産巢日之命に請したまへば、乃ち、蚶貝比賣と、蛤貝比賣とを遣して活しめたまふ、蚶貝比賣、蚶貝の殻を磨りけづり焼き焦して、蛤貝比賣、水を持つて、母の乳汁と塗りしかば、麗しき男子に成りて出で歩きたり。是に於て、八十神見て、又、欺きて、山に誘

△氷目矢 割目に挟む矢なり

△木國 紀伊

〔須勢理毘賣〕

ひ入れ、大樹を切伏せ、矢を茹め、其の木に打立て、其の中に入らしめて、氷目矢を打ち放ちて、拷殺したり。爾に亦、其の御祖の命、哭きつゝ求め、尋ね出して、其の木を拆きて、取り出で活して、其の子に告げたまはく。汝、此處に有らば、遂に、八十神に滅されむと、乃ち、木國の大屋毘古神の所に、速ぎ遣りたまへり。八十神、追ひ臻りて、弓に矢をつがふ時に、木の俣より、脱け出で、逃れ去れり。御祖の命、子に告げたまはく。須佐能男命の居れる、根堅州國に往けよ、其の大神、必らず善きやう計りたまふべしと。故に、命のまゝに、須佐之男命の所に到りしかば其の女、須勢理毘賣出で見て、目合して、相婚し還りて、其父に甚だ麗はしき神、來れりと言へり。其の大神、出で見て、此は、葦原色許男といふ神ぞと謂ひ、即ち、喚び入れて、其の蛇室に

△比禮を打振りて蛇蜂等拂ひ遠ざくる物

寢しめたまふ。是に於て、其の妻、須勢理毘賣命、蛇比禮を、其の夫に授けて云はく。其の蛇咋はむとせば、此の比禮を三度振りて、打ち撥ひたまへと、故に、教へし如くしたまひしかば、蛇、自ら静まりし故に、安眠りて、出でたまへり。亦、翌日の夜は吳公と蜂との室に入れしを、又、吳公、蜂の比禮を授けて、先の如く、教へたまひし故に、何事もなく出でたまへり。亦、鳴鏑を大野の中に射入れて、其の矢を採らしめたまふ。故に、其の野に入る時に、火を以て其の野を焼き廻らせり。是に於て、出づる所を知らざる間に、鼠、来て云ひけるは、内は富良富良、外は須夫須夫。かく言ふ故に、其處を踏みしかば、落ち入り隠れし間に、火は焼け過ぎぬ。爾に、其の鼠、其の鳴鏑を口に喰へて持ち來れり。其の矢の羽は、其の鼠の子等、皆な喫ひたり。

△内は富良々々 鼠の居る穴は、洞の如く空虚なり
△外は須夫々々 穴の外は其入口のスボマレルを云ふ

△八田間 廣大なる室

是に於て、其の妻、須世理毘賣は、喪具を持ちて哭きつゝ來り、其の父の大神は、已に、死ねりと思ひて、其の野に出で立てば、爾ち、其の矢を持ちて奉る時に、家に誘ひて八田間大室に喚び入れ、其の頭の虱を取らせたり。其の頭を見れば、多くの吳公あり是に於て、其の妻、掠の實と、赤土とを、其の夫に授けたれば、其の實を咋ひ破り、赤土を含みて、唾きたれば、其の大神、吳公を食ひ破りて、唾させりと思ひて、愛憐の情を起して寢たり。爾に、其の大神の髪を握りて、其の室の椽毎に結び着けて、五百人も懸らざれば、引く能はざる大石を、其の室の戸に、取り塞ぎて、其の妻、須世理毘賣を負ひて、其の大神の、生大刀、生弓矢及び其の天沼琴を取り持ちて、逃だせし時に、其の天沼琴、樹に觸れて、地、鳴動けり。故に其の寢る所の大神、聞き驚きて、

△天沼琴 玉を以て飾れる美しき琴

△いをしなせ 吾々睦
△たてまつらせ 意なり
△たてまつらせ 俗にお
メシアガレといふに
なし

△神語 神々の語りあ
ひ給ひし歌といふ意

拷網の 白き腕
素手抱き 手抱き拱り
真玉手 玉手さし纏
股長に 寐をし宿せ
豊御酒 獻らせ

此く歌ひて、即ち、互に杯をさしかはして、項に手と手をかけあひ、親しく並びて、今に至るまで鎮坐せり。此を神語と謂ふ。
此の大國主神、胸形奥津宮にある神、多紀理毘賣命を娶りて、生み給へる子、阿遲鉏高日子根神。次に、妹、高比賣命。亦の名は下光比賣命。此の阿遲鉏高日子根神は、今、迦毛大御神と謂ふなり。大國主神、亦、神屋楯比賣命を娶りて、生み給へる子、事代主神、亦、八島牟遲能神の女、鳥耳神を娶りて、生み給へる子、

鳥鳴海神。此の神、日名照額田毘道男伊許知邇神を娶りて、生みませる子、國忍富神。此の神、葦那陀迦神、亦の名は、八河江比賣を娶りて、生みませる子、速甕之多氣佐波夜遲奴美神。此の神、天之甕主神の女、前玉比賣を娶りて、生み給へる子、甕主日子神、此の神、淤加美神の女、比那良志毘賣を娶りて、生み給へる子、多比理岐志麻流美神。此の神、比比羅木之其花麻豆美神の女、活玉前玉比賣神を娶りて、生みませる子、美呂浪神。此の神、敷山主神の女、青沼馬沼押比賣を娶りて、生み給へる子、布忍富鳥鳴海神。此の神、若畫女神を娶りて、生み給へる子、天日腹大科度美神。此の神、天狹霧神の女、遠津待根神を娶りて、生み給へる子、遠津山岬多良斯神。
右、八島士奴美神より以下、遠津山岬帶神まで、十七世の神と

〔少名毘古那神〕

△波穗 波の高く立ちたる状を云ふ。是より直ちに「歸り來る神あり」へ讀けて見るべし

稱ふ。

大國主神、出雲の御火之御崎に坐す時に、波穗より、天之羅摩船に乗りて、蛾の皮を、肉剝に剝きて、衣服にして、歸り來る神あり。其の名を問へども、答へず。又、所從の諸神に問へども、皆知らずと云へり。爾に、蟾蜍云く、案山子は、必ず、知り居らむと云へば、即ち、案山子を召びて、問へる時に、此は、神産巢日神の御子、少名毘古那神なりと答ふ。其事を、神産巢日御祖命に白し上げしかば、此は、實に我が子なり。子の中に、我が手の俣より、脱けたる子なり、故に、汝、葦原色許男命と、兄弟と爲りて、其の國を作り堅めよと、告げたまふ。爾より、大穴牟遲、少名毘古那の二神、相並びて、此の國を作り堅めたまへり。然る後に、少名毘古那神は、常世國に渡りたまへり。其の少名毘古那

△常世國 ことにては海外の諸國をいふ

〔山田の曾富騰〕

△山田之曾富騰 山邊の田の案山子なり

△青垣 青山の廻りて垣のごとくなれるさまをいふ

神を顯はし白せし、案山子は、今に、山田の曾富騰といふ者なり。此の神は、足は歩かねども、天下の事を、盡く知れる神なり。是に於て、大國主神愁ひて、吾獨りにして何でか、此の國を得作らむ、孰れの神と與に、吾は、此の國を作らむやと告げたまへり。是の時に、海を光して依り來る神あり。其の神の言く。我を、厚く祭らば、吾、共く、に、作り成さむ。若し、然らずば、國成り難しと。大國主神曰く、然らば、如何に祭らば宜しきやと云ひたまへば、吾を、倭の青垣、東山の上に、齋き奉れと答ふ。此は、御諸山の上にある神なり。

其の大男神、神活須毘神の女、伊怒比賣を娶りて、生み給へる子、大國御魂神。次に、韓神。次に、曾富理神。次に、向日神。次に。聖神。 (五神) 又、香用比賣を娶りて、生み給へる子、大

香山戸臣神。次に、御年神。(二神)又、天知迦流美豆比賣を娶りて、生み給へる子、奥津日子神。次に、奥津比賣命。亦の名は大戸比賣神。此は、世人の崇めまつる、竈の神なり。次に、大山咋神、亦の名は、山末之大主神。此の神は、近淡海國の日枝山にあり。又、葛野の松尾にあり。鳴鑄神といふ神なり。次に、庭津日神。次に、阿須波神。次に、波比岐神。次に、香山戸臣神。次に、羽山戸神。次に、庭高津日神。次に、大土神。亦の名は、土之御祖神(九神)。

右、大年神の子、大國御魂神より以下、大土神まで、并せて十六神。
 羽山戸神、大氣都比賣神を娶りて、生み給へる子、若山咋神。次に、若年神。次に、妹、若沙那賣神。次に、彌豆麻岐神。次に、

〔水穂國の鎮定〕

△豊葦原之千秋之水穂國
 百秋も祝辭。水穂は五
 國も祝辭。水穂は五
 づみづしき稻穂。水穂は
 我が大日本帝國の美稱
 にして皇孫命の末長く
 稲の瑞穂を聞食すべし
 葦原の豊かなる國とい
 ふ意

夏高津日神。亦の名は、夏之賣神。次に、秋毘賣神。次に、久久年神。次に、久久紀若室葛根神。

右、羽山戸神の子、若山咋神より以下、若室葛根神まで、并せて八神。

天照大御の命を以つて、豊葦原の千秋の長五百秋の水穂國は、我が御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の、領さむ國ぞと、委任し給ひて、天降したまひたり。是に於て、天忍穗耳命、天浮橋に立ちて、詔りたまはく。豊葦原の千秋長五百秋の、水穂國は、甚だ喧がしと、更に、還り上りて、天照大御神に請したまへり。爾に高御産巢日神、天照大御神の命を以つて、天安河の河原に、八百萬の神を集めて、思金神に、思はしめて、詔りたまはく。此の葦原中國は、我が御子の領さむ國ぞと、委任したまへる國なり。

△道速振、荒振國神
威勢強く荒れ廻る國神

△天之麻迦古弓 鹿を射る弓。後にはたいてなる弓をも云へり。
△天之波矢 矢の羽の張りがりて大なる矢をいふ。

此の國に、道速振、荒振國神等の多くあるは、何の神を使はして之を服従せしめむとのりたまふ。思金神、及び、八百萬の神等、議りて、天菩比神を遣はさむと云へり。故に天菩比神を遣はしたれば、乃ち大國主神に媚附きて、三年になるまで、復奏せず。是を以て、高御産巢日神、天照大御神、亦、諸の神等に問ひたまはく。葦原中國に遣はせる、天菩比神、久しく復奏せず。亦、何の神を使はさば吉からむと。爾に、思金神答へて曰く。天津國玉神の子、天若日子を遣はさむと。故に、天之麻迦古弓、天之波波矢を、天若日子に賜ひて遣はせり。是に於て、天若日子、其の國に降りて、大國主神の女、下照比賣を娶り、亦、其の國を獲むと慮りて、八年に至るまで、復奏せず。爾に、天照大御神、高御産巢日神、亦、諸の神等に問ひたまはく。天若日子、久して、復奏

●雉のひたづか

△名鳴女 雉なり

△湯津楓 枝の繁りたる楓の木

△天之波士弓 櫛の木にて作れる弓。前に天之麻迦古弓とありし弓のことなり。
△天之加久矢 鹿を射る爲の矢前に天之波々

せず。又、何れの神を遣して、天若日子が、久しく留れる所由を問はしめむと問ひたまふ。是に於て、諸の神等、及び、思金神答へて曰く。雉、名鳴女を遣はさむと云ふ時に、詔りたまはく。汝行きて、天若日子に問ひて、汝を、葦原中國に使せる所以は、其の國の荒振神等を、服従せしめよとなり。何ぞ、八年に至るまで、復奏せざるやと云へとのりたまへり。爾に、鳴女天より降りて、天若日子が問なる、湯津楓の上に居て、委さに、天津神の詔命の如く言へり、爾に、天佐具賣、此の鳥の言ふことを聞きて、天若日子に、此の鳥は鳴く聲、甚だ悪し。故に射殺したまへと云ひ進むれば、即ち、天若日子、天神の賜へる天之波士弓、天之加久矢を持ちて、其の雉を射殺したり。爾に、其の矢、雉の胸より通りて、逆に射上げられて、天安河の河原に坐します、天照大御神、高

矢とありし矢のことなり

△矢の穴 此國より天
上へ矢を射通したる穴

木神の所に到れり。是の高木神は、高御産巢日神の別名なり。高木神、其の矢を取りて、見れば、其の矢の羽に、血著きたり。是に於て、高木神、此の矢は、天若日子に賜ひし矢なりと告げて諸の神等に示し、詔りたまはく、若し、天若日子、命を違へず、悪ぶる神を射たりし矢の、來れるならば、天若日子に中るな。若し、邪心あらば、天若日子、此の矢に中りて死ぬと云ひたまひて、其の矢を取りて、其の矢の穴より、衝き返したまひしかば、天若日子が、臥床に寝たる、胸に中りて死にたり、(此れ、還し矢恐るべしといふ本なり)。亦、其の雉還らず。故に、今に、諺に、雉の頓使といふ是れなり。

天若日子が妻、下照比賣の哭ける聲、風に傳はりて、天に到れり。是に於て、天にある、天若日子が父、天津國玉神、及び其の妻子

△岐佐理持 死者に供
いふ雁の頭 命傾く者
故にこの役 掃持を
掃除するに 毛掃持を
の除るに 爲すに
御食人より 死なむ者
△魚を食り 死なむ者
翠鳥は巧み 魚を食む
なれは者 雀は地を
たあるま 雀は地を
たあるま 雀は地を
泣く者 鳴く者
高き者 泣く者

も之を聞き、降り來りて、哭き悲しめり、乃ち、其處に、喪屋を作りて、河鴈を岐佐理持とし、鶯を掃持とし、翠鳥を御食人とし、雀を確女とし、雉を哭女とし、此く定めて、八日八夜、遊びたり。此の時、阿遲志貴高日子根神來りて、天若日子が喪を弔ひたる時に、天より降れる、天若日子が父、亦、其の妻、皆哭きて、我子は、死なずてありけり。我君は死なずて坐けりと云ひて、手足に取懸りて、哭き悲めり。其の過てる所以は、此の二神の容姿、甚だ能く似たり。是を以て、過てるなりけり。是に於て、阿遲志貴高日子根神、大いに怒りて曰く、我は、親しき友なればこそ、弔ひ來つれ。何故に、吾を、穢き死人と同じく見なすやと云ひて、佩びたる、十掬劔を抜きて、其の喪屋を切り伏せ、足を以て蹶散して棄てたり、此は、美濃國の、藍見河の河上なる、喪山といふ

者なり。其の持ちて切れる、大刀の名は、大量と謂ふ。亦の名は神度劔ともいふ。

阿治志貴高比子根神、怒りに任せ、名も告げずして飛び去りたまふ時に、其の同母妹、高比賣命、其の御名を知らさむと思ひて歌ひけらく。

天	在	る	や	弟	棚	機	の
所	な	が	せ	玉	の	御	統
御	統	に	嬰	明	玉	光	映
真	谷	に	貴	二	亘	ら	す
阿	治	志	貴	高	比	古	根
				の	神		

此の歌は、夷振なり。

是に於て、天照大御神詔りたまはく。亦、何れの神を遣はさば吉

△あめなるやおとなば
すべき織る女をいふ
△すなはせたる項にか
けたる緒に玉をいふ
すくまはる玉の意み
△あなはる玉の意み
く光あはる玉の意み
たにふる玉の意み
日を越えたる御光の
つを越えたる御光の
くを越えたる御光の
△夷振なり
て定めたる曲の名

「健御雷之男神」

からむと。思兼神、及び諸の神等、云へらく。天安河、河上の天の石屋にある、名は、伊都之尾羽張神を、遣はすべし。若し、亦、此の神ならずば、其の神の子、建御雷之男神を、遣はすべし。其の天尾羽張神は、天安河の水を、逆に塞き上げて、道を塞き居れば、他神は、得行かじ。故に、別に、天迦久神を遣はして、問ふべしと云へり。故に、天迦久神を使はして、天尾羽張神に問ふ時に、謹で仕へ奉らむ、然れども、此の道には、僕が子、「建御雷神を遣はすべしと答へて、乃ち差し上げ奉れり。爾に天鳥船神を、建御雷神に副へて遣はせり。是を以て、此の二神、出雲國の伊那佐の小濱に到りて、十拳劔を抜きて、波の上に、逆に刺し立て、其の劔の前に跌坐ゐて、大國主神に問て曰く、天照大御神、高木神の命を以て、問ひに使はせり。汝が領せる葦原中國は、我が御

△天逆手 祭え手の義
にて手を拍つこと
△青柴垣 葉の青き生
木の枝を以て作れる柴垣

子の治むべき國と、委任し賜へり。汝が心奈何と、問ひたまふ時に、答へて曰く。僕は、得云はじ。我が子、八重言代主神、白すべきを、鳥魚を獵せん爲め、御大之崎に往きて、未だ還り來らずと。故に、天鳥船神を遣はして、八重事代主神を召し來つて、問ひ賜ふ時に、其の父の大神に、恐し。此の國は、天神の御子に奉りたまへと言ひて、乃ち、其の船を踏み傾けて天逆手を拍ち、之を青柴垣に化して隠れたり。爾に、大國主神に問ひたまはく。今汝が子、事代主神、此く云へり。亦、云ふべき子ありやと問ひたまふ。是に於て、亦白しつらく、亦、我が子、建神名方神あり。此を除きては無し。此く云ふ折しも、其の建御名方神、千引石を手の先に擎げて來りて、誰ぞ、我が國に來て、忍びく此く物言ふ。然らば力競べせむ。我れ先づ、其の御手を取らむといふ。其

△洲羽海：諏訪湖

の御手を取らしむれば、即ち、柱の如く立てる氷に變化し、亦、劔の刃に變化せり。故に、懼れて退ぞき居り。爾に、其の建御名方神の手を取らむと云ひて、取れば、若葦を取るが如く、搦み批ぎて、投げ離ちたまへば、即ち、逃げ去れり。追往きて、科野國の、洲羽海に到りて、殺さむとしたまふ時に、建御名方神、白しつらく。恐れ入れり。我を殺したまふな。此の地を除きては、他所に行かじ。亦、我が父、大國主神の命に違はじ、八重事代主神の言に違はじ、此の葦原中國は天神の御子の命のまゝに、獻らむと云ひたまへり。

更に又、還り來りて、大國主神に問ひたまはく。汝が子等、事代主神、建御名方神二神は、天神の、御子の命のまゝに、違はじと云へり。故に、汝が心、奈何と問ひたまふ。答へて曰く、僕が子

等、二神の、云へるまゝに、僕も違はじ。此の葦原中國は、命のまゝに獻らむ。唯、僕が住所をば、天神の御子の大業を繼續したまふ、烟の盛に上れる、天神の厨の屋根の烟突の如く、底津石根に、宮柱、布斗斯理、高天原に、氷木、多迦斯理て治め賜はじ、僕は幽界に、隠れて此世を守護せむ。亦、我が子等、百八十神は、八重事代主神、神の前後に立ちて、仕へ奉らば、背く神はあらじと。此く白して、乃ち、隠れたり。故に其の云へるまゝに、出雲國の多藝志の小濱に、天の御舎を造りて、水戸神の孫、櫛八玉神を、膳夫として、天の御饗を獻る時に、禱りて曰く、櫛八玉神、鶺鴒に化りて、海底に入り、底の粘土を咋み出で、多くの土器を作り、海藻の莖を刈りて、燧白に作り、海葦の莖を、燧杵に作りて、火を鑽り出して曰く。是の我が燧れる火は、高天原には、神

△多藝志の小濱 出雲

△燧白 火を鑽り出す
白なり△燧杵 火を鑽り出す杵なり

〔天忍穗耳命の降臨〕

△とをい たわたわにて鱸の多き爲に載する物の撓むさまなり

産巢日御祖命の、賑はしき、天神の厨の烟突の如く、幾拳も長く垂れ下るまで焼き擧げ、地の下は、底津石根に、焼き凝して、栲繩の、千尋の繩を打ち延べ、釣りする海人の、口大いに緒細かなる鱸、さわ〜に引き寄せ騰げて、拆竹の、とを、とを、に、天上と同じき魚の料理を獻らむ、と云へり。建御雷神返り上りて、葦原中國、服従平定したりと、復奏したまへり。爾に、天照大御神、高木神の命を以ちて、太子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に詔りたまはく。今、葦原中國、平定せりと云ふ。故に委任せるが如く、降りて、之を治めよとのりたまふ。太子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命、答へたまはく。僕は、將に降らむとして旅装せし間に、子生れたり、名は天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命と云ふ。此の子を、降すべしとまをしたまへり。

此の御子は、高木神の女、萬幡豐秋津師比賣命（よろづはたとよあきつしひめのみ）に合ひて、生み給へる子、天火明命（あめのほろかりのみこと）、次に、日子番能邇邇藝命（ひこはのね、ぎの）（二神）にあり。是を以て、白したまふまゝに、日子番能邇邇藝命に詔りして、此の豊葦原水穗國は、汝の治むべき國なりと、委任したまふ。故に命に隨ひ、天降るべしと、のりたまへり。日子番能邇邇藝神、天降りたまむとする時に、天の八衢（やちまた）に居て、上は、高天原を光し。下は葦原中國を光す神、是にあり。爾に、天照大御神、高木神の命を以ちて、天宇受賣神（あめのうらぶの）に詔りたまはく。汝は、手弱女（てわやめ）なれども、伊牟迦布神（いむかぶの）と、面勝神（おもかつの）なり。故に専ら汝往きて、吾が御子の、天降らむとする道を、誰ぞ、如此て居ると、問へと、のりたまふ。問ひ賜ふ時に、答へ白さく。僕は國神、名は猿田毘古神（さたびこの）なり。出で居る所以は、天神の御子、天降りますと聞くが故に、御前に仕へ

△伊牟迦布 強敵にも
打向ふ 敵對する神と
面を合せて怖めず臆せ
ざる神

〔猿田毘古〕

奉らむとして、参り向ふるなりと云へり。爾に、天兒屋命、布刀玉命（ふたたまのみこと）、天宇受賣命（あめのうらぶのみこと）、伊斯許理度賣神（いしこりどめのみこと）、玉祖命（たまのやのみこと）、并せて五部屬の長を配り加へて、天降らしめたまへり。是に於て、前に大御神を、招き奉りたる品なる、八尺勾璣（やつかのまがたま）、鏡、及び、草那藝劍（くさかぎの）、亦、常世思金神（とこよのしをかねのみこと）、手力男神（たぢからをのみこと）、天石門別神（あめのいばとわけのみこと）を副へ賜ひて、詔りたまはく、此の鏡は、我が魂として、吾を見るが如くせよ。次に、思金神は、大御神にかゝる萬事を引き受けて、執り行なへと、のりたまへり。此二神は、佐久久斯侶（さくくしろう）、伊須受能宮（いすぞののみや）に祭る、次に、登由宇氣神（とようけのみこと）。此は、外宮の度相（わたあひ）に坐す神なり、次に、天石戸別神（あめのいしどの）、亦の名は櫛石窓神（いばまどの）、亦の名は、豊石窓神（とよいばまどの）とも謂ふ。此の神は、御門（みかど）の神なり。次に、手力男の神は、佐那縣（さながた）に坐せり。天兒屋命（あまのこやのみこと）、（中臣連等（なかとみらのらじ）が祖）。布刀玉命（ふたたまのみこと）、（忌部首等（いみべのおびと）が祖）。天宇受賣命（あめのうらぶのみこと）、（猿女君等（さるめのみこと）が祖）。伊

〔内宮外宮〕

△佐久久斯侶伊須受能宮
即皇大神宮宇治鎮座

△佐那縣 伊勢多氣郡
佐那谷の仁田村

△久士布流多氣 大隅
國霧島山

斯許理度賣命、(鏡作連等が祖)。玉祖命、(玉祖連が祖なり)。爾に、天津日子番能邇邇藝命、天上の御座所を離れ、天の八重多那雲を、押し分けて、鋭き威勢にて、道を押し開きつゝ降りたまひ、天之浮橋に、整列して、進發あり、竺紫の日向の、高千穂の久士布流多氣に天降りませり。天忍日命、天津久米命、二人、天之石鞆を負ひ、頭權の大刀を佩き、天之波士弓を持ち、天之眞鹿兒矢を手挟み、御前に立ちて仕へ奉れり。其の天忍日命、(此は大伴連等が祖)。天津久米命、(此は久米直等が祖なり)。是に於て瘠せたる不毛の地なる、韓國嶽を、笠沙の御崎に尋ね通りて、此地は、朝日さし、夕日さす國なり、甚だ吉き地なりと、詔りたまひて、地の底を深く掘り穿ち、太き柱を築き建て、天を衝くばかりに高き千木ある御殿を造りて、ましませり。天宇受賣命に詔りた

△笠沙 薩摩阿多郡

△送り奉れ 猿田毘古
を伊勢に送るなり

まはく。此の御前に立ちて仕へ奉りし、猿田毘古大神をば、専ら顯はし申せる汝、送り奉れ、亦、其の神の名をば、汝の名として朝廷に仕へ奉れと、是を以て、其の猿田毘古の男神の名を負ひて、女を猿女君と呼ぶも、是れが爲めなり。其の猿田毘古神、阿邪訶にある時に、漁して、赤貝に其の手を咋ひ合はされて、海水に溺れたり。故に、其の底に、沈み居たまふ時の名を、底度久御魂と謂ひ、其の海水の粒立つ時の名を、都夫多都御魂と謂ふ、其の沫立つ時の名を、阿和佐久御魂と謂ふ。是に於て。猿田毘古神を送り還りて。乃ち、悉く大小の魚を追ひ聚めて、汝は、天神の御子の御饌の用に立つ意ありやと問ふ時に、諸の魚ども、皆立ち奉らむと白す中に、海鼠白さず、爾に、天宇受賣命、海鼠に謂ひけらく、此の口は、答へせぬ口かといひて、紐小刀を以ちて、其の口

を拆きたり。故に、今に、海鼠の口拆けたり。是を以て、歴代、
鳥より、最初に御贄を獻れる時に、猿女君等に給ふなり。

〔木花佐久夜毘賣〕

天津日高日子番能邇邇藝能命、笠沙の御崎にて麗しき美人に遇ひ、誰が女ぞと問ひたまへば、大山津見神の女、名は、神阿多都比賣。亦の名は、木之花之佐久夜毘賣と謂へり。又、汝が兄弟有りやと問ひたまへば、我が姉、石長比賣ありと答ふ、詔りたまはく、吾、汝に婚せむと欲ふは、奈何にと、のりたまへば、我が一存にては得答へ白さじ、我が父、大山津見神、答へ白さむと云ふ。故に其の父、大山津見神に、乞ひに遣はしける時に、大に喜びて、其の姉、石長比賣を副へて、机に載せたる數多の祝儀の品を持たしめて、出したり。其の姉は、甚だ、醜きに因りて、返し送りたまひて、唯、其の妹、木之花之佐久夜毘賣をのみ留めて、

一夜婚あり、爾に、大山津見神、石長比賣を返したまへるに因りて、大いに、耻ぢて、白しけるは、我が女、二人並べて奉れる由は、石長比賣を使ひたまはじ。天神の御子の命は、雨零り、風吹けども、恒なる石の如く、千代も八千代も坐しませ。亦、木之花之佐久夜毘賣を使ひたまはじ、木の花の榮ゆるが如く、榮えませと、誓ひて進りしなり。然るに、今、石長比賣を返して、木之花之佐久夜毘賣のみ獨り留めたまひつれば、天神の御子の御壽は、木の花の散り行く如く、脆くたましまさむと、白したまへり。是を以て今に至るまで、天皇命等の御命は長くはまさざるなり。後に、木之花之佐久夜毘賣、参りて白したまはく。妾、はらめるを、今、産むべき時となれり。是の天神の御子は、私に、産みまつるべきにあらず。故に請すと、爾に、佐久夜毘賣、一夜にや

妊める。是は我が子に非ず。必ず、國神の子なるべしと、詔りたまへば、吾が妊める子、若し、國神の子ならむには、事無く産むこと能はじ。若し、天神の御子に坐さば、目出たく産るべしと白して、戸なき八尋殿を作りて、其の殿内に入り、土を以て塗り塞ぎ、産む時に方りて、其の殿に、火を著けて、産みたり。故に其の火の盛に燃ゆる時に生まるゝ子の名は、火照命。此は隼人、阿多君の祖。次に、生れ給へる子の名は、火須勢理命。次に、生れ給へる子の名は、火遠理命、亦の名は、天津日高日子穗穗手見命（三神）。

火照命は、海佐知昆古として、大小の魚を取りたまひ、火遠理命は、山佐知昆古として、諸の鳥獸を取りたまへり。爾に、火遠理命、其の兄、火照命に、各々、獵具を易へて、用ゐてひと謂ひて

〔海佐知山佐知〕
 △海佐知昆古 海に獵
 して幸を得る男の意
 幸は獲物なり。次の山
 佐知も亦同じ

三度乞ひしかども、許さざりき。然れども、遂に、纒に、易へたまへり、火遠理命、漁具を以ちて、魚を釣るに、都て一魚も得たまはず。亦、其の鉤をさへに、海に失ひたまへり。是に於て、其の兄、火照命、其の鉤を乞ひて、山の獵具も、己が獵具なり、海の漁具も、己が漁具なり、今は各、之を返さむと謂ふ時に、其の弟、火遠理命答へて、汝の鉤は、魚を釣りしに、一魚も得ずて、遂に、海に失ひたりと、云ひたまへども、其の兄強いて返せと責め求む。故に其の弟、佩ぶる所の十拳劔を破りて、五百鉤を作りて、償ひたまへども、取らず。亦、一千鉤を作りて、償ひたまへども、受けずして、猶ほ、其の初の鉤を返へせと云へり。是に於て、其の弟、海邊に、泣き患ひ居ます時に、鹽椎神來りて、何にぞ虚空津日高の泣き患ひたまふ所由はと、問へば、答へて言

△無間勝間 水の入る
べき隙なき小舟を云ふ

はく。我れ、兄と鉤を易へて、其の鉤を失ひたり。然るに、其の鉤を返せと乞ふが故に。多くの鉤を、償ひしかども、受けずて、猶ほ、其の初の鉤を返せと云ふなり。故に泣き患ふと。爾に、鹽椎神、我れ、汝の爲めに、善く謀るべしと云ひて、即ち、無間勝間の小船を造りて、其の船に載せ奉りて、教へて曰く。我れ、其の船を押し流さば、差や暫し往け、善き路あらむ。乃ち、其の路を乗り往かば、魚鱗の如く、立て並べて造れる宮室あらむ。綿津見神の宮なり。其の神の門に到らば、傍の井の上に、枝葉の繁れる桂の樹あらん。其の木の上に坐しまさば、其の海の神の女、見て善きやうに謀らはむと教へたり。故に教へに隨ひ、小し行きけるに、全く、其の言の如くなりしかば、即ち、其の桂の樹に登りて居たり。爾に、海の神の女、豊玉毘賣の侍女、玉器を持ちて、水

を酌まむとする時に、井に光りあり。仰ぎて見れば、麗しき男子あり。甚だ、異奇と以爲へり。火遠理命、其の婢を見て、水を得しめよと乞ひたまふ。婢、乃ち、水を酌みて、玉器に入れて進めたり。水をば飲みたまはずして、御頸の璽を解きて、口に含みて、其の玉器に唾き入れたまふ。是に於て、其の璽器に著きて、婢、璽を、得離たす。故に璽を著けながら、豊玉比賣命に進めたり。其の璽を見て、婢に、若し、門の戸に人ありやと問ひたまへば、我が井の上の桂の樹の上に、人あり。甚だ、麗しき男子なり我が王にも優りて、甚だ貴し。其の人、水を乞はせる故に、奉りしかば、水をば飲ますして、此の璽を唾き入れたまへり、得離たぬ故に、入れながら持ち來りて獻れりと白す。豊玉毘賣命、奇と思ひて、出で見て、乃ち、其容貌の麗しきに感じ、互に見合ひ

て、其の父に、吾か門に、麗しき人ありと白したまふ。海の神自ら出で見て、此の人は、天津日高の御子、虚空津日高にませりと云ひて、即ち、内に導きて入れ奉りて、海驢の皮の疊八重を敷き。亦、純疊八重を、其の上に敷きて、其の上に坐らせまつりて。夥多の饗應の品を机に載せて、御饗して、其の女、豊玉毘賣を婚せまつれり。故に三年の間、其の國に住みたまへり。是に於て、火遠理命、其の初め事を思ひ出して、大に歎息たまふ。豊玉毘賣命、其の歎息を聞きて、其の父に白したまはく。三年住みたまへども、恒は歎息たまふことも無かりしに、今夜大なる歎息、一つしたまひしは、何か由故ある事ならむと。其の父の大神、其の聲夫に問ひけるは、今且、我が女の語るを聞けば、三年坐しませども、恒は、歎息たまふ事も無かりしに、今夜、大な

△淤煩鉤云々 淤煩は心の結ばれて明かならざる事△須々は心おちつかずあさはかなる意△字流は愚なる意以上は鉤の悪しきを云ふ

る歎息したまへりとへ云り。何か由故あるにや。亦、此處に來たまへる故は、奈何にぞと、問ひまつれり。爾に其の大神に、備さに、其の兄の、失なひたる鉤を責め求むる状を、語りたまへり。是を以て、海の神、悉く、海の大小魚を呼び集めて、若し、此の鉤を取れる魚ありやと問ひたまふ。諸の魚ども白すに。頃者、女鯛ども、喉に鯁ありて、物を得食はずと愁ひ居れば、必ず、是れ取りたるならむと。是に於て、女鯛の喉を探りしかば、鉤あり、乃ち、取り出し、清め洗ひて、火遠理命に奉る時に、其の綿津見大神、誨へまつりけるは。此の鉤を、其の兄に給はむ時に、言ひたまふべき事は、此の鉤は、淤煩鉤、須須鉤、貧鉤、宇流鉤と云ひて、背向きになりて渡したまへ、然して、其の兄、高田を作らば、汝は、下田を營りたまへ、其の兄、下田を作らば、汝は高田

〔鹽滿珠鹽乾珠〕

△上國海神の國より
上なれば此國の事を云
ふ

を營りたまへ、然か爲たまはゞ、吾、水を掌れば、三年の間に、必ず、其の兄は、貧窮くならむ。若し、其れ、然か爲たまふ事を恨みて、攻戦なば、鹽盈珠を出して溺らし、若し、其れ、愁ひて救ひを請はゞ、鹽乾珠を出して活し、斯くして苦めたまへと云ひて、鹽滿珠、鹽乾珠、並せて、兩箇を授け、乃ち、悉く、和邇魚どもを召ひ集めて、問ひて曰く。今、天津日高の御子、虚空津日高、上國に出幸まさむとす。誰は、幾日に送り奉りて、覆奏さむやと、故に、各々、身の長さに隨ひ、日を限りて白す中に、一尋和邇、僕は一日に送りまつりて還り來むと白す。其の一尋和邇に、然らば、汝送り奉れよ、海中を渡る時に、怖ろしき目を見せ奉るなと告げて、即ち、其の和邇の頸に載せて、送り出せり。斯くて一日の内に、送り奉れり。其の和邇、返らむとせし時に、佩ふる

所の紐小刀を解きて、其の頸に著けて、返したまへり。故に其一尋和邇をば、今に、佐比持神といふ。是を以て備さに海神の教へし言の如くして、其の鉤を與へたまへり、爾れより後、其の兄、愈々、貧しくなりて、更に、荒き心を起して迫り來れり。攻めんとする時は、鹽盈珠を出して、溺らし、愁ひて救を請へば、鹽乾珠を出して救ひ、此くして苦めたまふ時に、稽首して白さく。僕は今より後。汝の、晝夜の守護人と爲りて仕へ奉らむと。今に至るまで、其の溺れし時の種々の態をなし、絶えず朝廷に仕へ奉るなり。

海神の女、豊玉毘賣命、自ら出でて、白したまはく。妾已くより妊身を、今、産むべき時に爲りぬ。此を思ふに、天神の御子を、海原に生みまつるべきにあらず。故に、参りたりと白したま

△葺き合への葺終らぬなり

△八尋和邇御産に苦しみ給ふ状を鰐とも或は龍とも語り傳へたるなり

へり。即ち、其の海邊の波打際に、鶺鴒の羽を屋根に葺きて、産殿を造る。其の産殿、いまだ葺き合へぬに、御腹忍へがたくなりて、産殿に入りたまひ。産みまさむとする時に、穗々手見命に言ひたまはく。凡て、佗國の人は、産時に臨れば、本國の形になりて産むなり。故に妾も、今、本の身になりて、産まむとす。妾を見たまふたと云へり。其の言を奇しと思ひて、其の方に産みたまふを竊かに伺ひたまへば、八尋和邇に化りて、腹這ひ廻はれり。即ち、見て大に驚き畏れて、遁げ退きたまへり。爾に、豊玉毘賣命、其の伺見たまひし事を知りて、心耻しと思ひ、其の子を生み置き、妾、恒は海道を通ひて、往來せむと欲ひしを、吾が形を伺見たまひしが、甚だ、忤かすと白して、即ち、海と此國との境を塞ぎて返り入れり。是を以て、其の産める御子の名を、天津日

〔鶺鴒草葺不合命〕

△をさへひかれど玉を通せる其の緒まががけの意△きみがつくしそひし白玉のごとき美しき君の御ありさまがの意

△おきつとり鶺鴒にかいる枕詞△よのここととくになり一生涯は忘れ

△高千穂宮 大隅國西贈嶽郡四國分村

高日子波限建葺鶺鴒草葺不合命と謂ふ。然れども、後は、其の伺見たまひし情を恨みつゝも、戀しきに忍へたまはずて、其の御子を養育しまつる縁に因りて、其の妹、玉依毘賣にことづけて、歌を獻りたまへり。其の歌に曰く。

赤玉は 緒さへ光れど
白玉の 君が装ひし
貴とくありけり

其の比古遅、答へたまひける歌に曰く。

澳鳥 鶺鴒着島に
吾率寝し 妹は忘れじ
世の盡に

日子穗穗手見命は、高千穂宮に、五百八十歳ましませり。御陵は

△常世國、こゝは朝鮮
をいふ△妣國として
御母玉依毘賣命の國な
るによりての意なり

即ち、其の高千穂山の西のかたに在り。是の天津日高日子波限建
鵜葺草葺不合命、其の姨、玉依毘賣命を娶りて、生みませる御子
の名は、五瀬命。次に、稻氷命。次に、御毛沼命。次に若御毛沼
命。亦の命は、神倭伊波禮毘古命（四神）。御毛沼命は、波の穂を
眺みて、常世國に渡り、稻氷命は、妣國として、海原に入りませ
り。

標註 今文古事記（上卷） 終

標註 今文古事記（中卷）

神武天皇の朝

神倭伊波禮毘古命、其の兄五瀬命と共に、高千穂宮にあり、議し
て曰く。何れの地にあらば、天下の政を平かに聞くことを得む。
猶ほ、東に行かん事を思ふと。即ち、日向より發して、筑紫に行
幸あり。豊國の宇沙に到れる時に、其の土人、名は、宇沙都比古
宇沙都比賣の二人、足一騰宮を作りて、大御饗を獻れり。其地よ
り遷りて、筑紫の岡田宮にあること一年。亦、其の國より、阿岐
國に上幸し、多邪理宮にあること七年。亦、其の國より遷りて、

△足一騰宮 宮の造り
様によりて名けたる也
△筑紫 九州の總名な
れども此には筑前筑後
の二國を指す
△豊國 今の豊前豊後

△吉備 美作備前備中
備後四ヶ國の古名

△速吸門 豊後梅部郡

△浪速之渡 浪速は攝津國大阪より尼ヶ崎邊までの古名
△青雲之白肩津 青雲は白の枕詞。白肩の津は河内國河内郡日下

吉備の高島宮にあること八年なり。其の國より上幸の時に、龜の甲に乗りて、釣しつゝ、鳥の羽ばたきする如く、袖を振りて、大御船を招き奉る人に、速吸門に遇へり、喚び寄せて、汝は誰ぞと、問はれければ、僕は國神、名は宇豆毘古と答ふ。又、汝は、海道を知れりやと、問はれければ、能く知れりと答ふ。又、従ひ仕へ奉るやと、問はれければ、仕へ奉るべしと答ふ。乃ち、槁機を指し渡して、其の御船に引き入れて、名を槁根津日子と賜ふ。(此は、倭國造等が祖なり)。其の國より上行の時に、浪速の渡を経て、青雲の白肩津に着きたまふ。此の時、登美能那賀須泥毘古、軍を興し、待ち向へて、戦ひしかば、御船に入れたる楯を取りて下り立ちたまふ。故に其の地を號けて楯津と謂へるを、今に、日下之蓼津と云ふ。登美毘古と戦ひたまふ時に、五瀬命、御手に

△痛矢串 するごき矢
△日神 天照大御神を申す
△痛手 重傷をいふ

△血沼海 和泉和泉郡
△男之水門 同國日根郡男里村
△男健 猛き勢を現すなり

△竈山 紀伊名草郡和田村
△熊野村 紀伊牟婁郡

△天神の御子 神武天皇を申す

登美毘古が痛矢串を負ひ、曰く、吾は日神の子にして、日に向ひて戦ふは良からず、故に賤奴が痛手をも負ふなり、今より行き廻りて、日を背負ひて撃たむと、心に期し、南の方より廻り行き、血沼海に到りて、其の手の血を洗ひたまふ。故に血沼海とは謂ふなり。其地より廻りて、紀國の男水門に到りて、詔りたまはく、賤奴が放てる矢の爲めに死なむかと、男健して薨じたまふ。故に其の水門を、男水門と謂ふ。陵は紀國の竈山に在り。神倭伊波禮毘古命、其地より廻りて、熊野村に到れる時に、大なる熊、鬚に出入して、即ち失せたり。爾に、神倭伊波禮毘古命、倏ち病に罹り、軍兵も皆、病の爲に臥したり。此の時、熊野の高倉下、一横刀を齎ちて、天神の御子の臥せる地に到りて獻れるに、天神の御子、即ち、寤め起きて、長寢しつるかなと詔りたまふ。

其の横刀を受取たまふ時に、其の熊野山の、荒ぶる神、自ら皆切り仆されて、其の惑ひ臥せる所の軍兵、悉く寤め起きたり。天神の御子、其の横刀を獲たる所由を問ひたまへば、高倉下答へて白さく。己、夢に、天照大神、高木神の二神、建御雷神を召して詔りたまはく。葦原中國は痛く騒がしくありけり、我が子等、惡神の毒氣によりて煩はさる。其の葦原中國は、専ら汝が平定せる國なれば、汝、建御雷神降りてよと詔りたまへり。答へて白さく。僕降らすとも、其の國を平定したる横刀あれば降すべし。（此の刀の名は、佐士布都神、亦の名は、瓊布都神、亦の名は、布都御魂と云ふ。此の刀は、石上神宮にあり）。此の刀を降すには、高倉下が倉の頂を穿ちて、其より墮し入れむとまをしたまへり。故に建御雷神、教へて曰く。汝が倉の頂を穿ちて、此の刀を墮し入れ

△石上 大和山邊郡山邊村

△朝目 朝起き立てに吉きものを見れば朝目吉きなり

△八咫鳥 大なる鳥

△吉野河 大和
△笠竹を編みて魚を取る具

△阿陀 大和宇智郡阿田村

む。故に、朝目吉く、汝取り持ちて、天神の御子に獻れと教へたまふ。夢の教への如くに、且に己が倉を見れば、信に横刀ありたり。故に是の横刀を獻れりと白す。是に於て、亦、高木大神、諭したまはく、天神の御子、此より奥に、入ること莫れ。荒ぶる神、甚だ多し。今、天より、八咫鳥を遣はさん、其の八咫鳥に導かれて、其の立む後より行きたまふべしと。其の教へに隨ひて、八咫鳥の後より、行きたまひしかば、吉野河の河尻に到れり。時に笠を作ちて、魚を取る人あり。天神の御子、汝は誰ぞと、問はれければ、僕は、國神、名は贊持の子と答ふ。（此は、阿陀の鵜養の祖なり）。其地より行けば、尾の生えたる人、井より出で来る、其の井光りあり。汝は、誰ぞと問へば、僕は、國神、名は、井冰鹿と答ふ。（此は、吉野首等が祖

△訶夫羅前 大和宇陀郡
△押機 踏めば陥りて
△使 八咫鳥

なり。即て、其の山に入りまし、かば、亦、尾ある人に遇へり。此の人、巖を押分けて出で来る、汝は、誰ぞと問へば、僕は國神名は石押分の子、今、天神の御子、來たまへりと聞ける故に、参りて向へまつるなりと答ふ。(此は、吉野國巢の祖なり)。其他より踏み穿ち越えて、宇陀に行き給ふ。故に宇陀の穿といふ。爾に、宇陀に、兄宇迦斯、弟宇迦斯と云ふ二人あり。故に先づ八咫鳥を遣はして、二人に問はしめたまはく、今、天神の御子來たまへり、汝等仕へ奉らむやと。是に於て、兄宇迦斯、鳴鏑を以ちて、其の使を待つて射返したり。故に其の鳴鏑の落たりし地を、訶夫羅前と謂ふ。待つて撃たむと云ひて、軍兵を聚めしかども、得聚めざりしかば、仕へ奉らむと欺りて、大殿を作り、其の殿内に、押機を張りて、待ちける時に、弟宇迦斯、先づ参り向へて拜して曰く。

△伊賀 ウメがと云ふ
に同じ意禮と共に人を
賤しめ罵る言

△血原 大和宇陀郡上
田口村

△鳴はさやらず
△勇細 鳴は
かいらず

僕が兄、兄宇迦斯、天神の御子の使を射返し、待ち攻めしむとて、軍兵を聚むれども、得聚めざれば、殿を作り、其の内に、押機を張りて、待ち取らむとす、故に参り向へて、告げ白すと云へり。爾に、大伴連等が祖、道臣命、久米直等が祖大久米命二人、兄宇迦斯を召して、罵りて云はく。伊賀作り仕へ奉れる大殿の内には、意禮、先づ入りて、其の仕へ奉らむとする状を、明白にせよといひて、横刀の柄を握り、矛を引きさしごき、弓に矢をつがへて追ひ入る、時に、己が張り置ける押に打れて死ねり。即ち、引き出して斬る。故に其地を、宇陀の血原と謂ふ。然して。其の弟宇迦斯が獻れる大饗をば、悉く其の軍人どもに賜へり。此の時の歌に曰く。

宇陀の高城に 鳴 霜 張 る
我が待や 鳴は障らず

△其根莖云々 登美毘古
古と其の類を一斷に
して残らず討ち滅さん
との意

△口響く 口がひりひ
りする様に吾は兄の子
を暫しも忘れはせじ

此く歌ひ、刀を抜きて、一時に打ち殺し。然る後、登美毘古を撃
むとせし時の歌に曰く。

御稜威々々々し
粟生には
其根莖
撃ちてしやまむ

又歌ひて曰く。

御稜威々々々し
垣下に
口響く
撃ちてしやまむ

久米の子等が
韭一莖
其根芽繋ぎて

久米の子等が
植し
吾は忘れじ

又歌ひて曰く。

△神風 伊勢の枕詞

△細螺の云々 細螺と
いふ貝の大石に
とひ附ける如く敵軍を
圍まんとなり

△伊那佐の山 大和宇
陀郡山路村の山
も木の間よりなり
△木の間に何ひ敵
の動作をきて何と
意△しまつて何と
いますけにこれ枕詞
糧食を持来て飢を助
よとなり

神風の
大石に
細螺の
撃ちてしやまむ

又、兄師木、弟師木を撃ちたまへる時に、軍兵、暫し疲れたり。

其時の歌に曰く。

楯並めて
樹の間従も
戦かへば
鳥津鳥

今助けに来ね

爾に、邇藝速日命、來りて、天神の御子に白さく、天神の御子、

△天津瑞 天神の御子にましますしるしの寶
 △物部連 武を掌るもの部長
 △穗積 大和十市郡
 △天皇の御膳に奉仕するより云へり
 △畝火之白檮原宮 大和高市郡
 △阿多 薩摩阿多郡
 △三島 攝津
 △美和 大和式上郡三輪
 △富登 陰門

天降りませりと聞くが故に、追ひて参り降り來れりと云ひ。即ち天津瑞を獻りて仕へ奉る。故に邇藝速日命、登美毘古が妹、登美夜毘賣を娶りて生める子、宇摩志麻遲命、（此は物部連、穗積臣、妹臣の祖なり）。此く、荒ぶる神等を懐け和げ、不逞の徒を退ぞけたまひて、畝火の白檮原宮にありて、天下を治めたまへり。日向にある時、阿多の小椅君の妹、名は阿比良比賣を娶りて、生める子、多藝志美美命。次に、岐須美美命、二人あり。然れども更に、大后と爲すべき美人を求めたまふ時に、大久米命の曰く。此に神の御子なりと謂ふ媛女あり。其を神の御子なりと謂ふ所以は、三島渥咋の女、名は勢夜陀多良比賣、其の容姿麗はしかりければ、美和の大物主神、見て感ずる所あり、其の美人の厠に入れる時に、朱塗の矢に化りて、其の厠の下より、其の美人の富登を

△高佐士野 大和十市郡南浦村

△七行く 七人行く
 △誰をし云々 七人の少女の中にて何れを撰び取らん

突きたまへり。其の美人、驚き騒ぎて立ち走れり。乃ち、其の矢を持ち來りて、床の邊りに置きしかば、忽ち、麗しき男子となり、其の美人を娶りて、生める御子、名を富登多々良伊須々岐比賣命。亦の名は、比賣多々良伊須氣余理比賣と謂ふ。（是は、其の富登と云ふ事を惡みて後に改めたる名なり）。是を以て、神の御子とは謂ふなりとまをせり。是に七人の媛女、高佐士野に遊べり。伊須氣餘理比賣、其の中に在り。大久米命、其の伊須氣余理比賣を見て、歌を以て天皇に白しけらく。

倭の 高佐士野を
 七行くの 媛女等
 誰をし 纏かむ

爾に、伊須氣余理比賣は、其の媛女等の前に立てり。天皇、其の媛女等を見はして、御心に、伊須氣余理比賣の、最も前に立てることを知りたまひ、歌を以て答へたまはく。

且々々も

彌前いささき立てる

可愛をし覚かむ

大久米命、天皇の命を以て、其の伊須氣余理比賣に詔れる時に、其の大久米命の、鋭き目つきを見て、奇しと思ひて。

胡鸞こりん鶴つ鶴つ

千鳥ちどり真ま鴉と

何裂ける利目

と歌ひければ、大久米命。

媛女ひめに

直ただに逢あはむと

吾裂ける利目

△且々 儘かならぬや
うなれども
△えをし云々 可愛き
少女を取らん
△命 勅命

△胡鸞云々 皆鳥の名
其鳥の目の圓きを大久
米命の目の圓きを大久
△何裂る利目 何故其
様さまに大きな目をして見
るぞ

△直に逢はん云々 直
ちに汝に逢はんとして吾
が目の鋭きなり

△狭井川 大和

と歌ひて答へたり。其の嬢子、仕へ奉らむと白す。

伊須氣余理比賣命の家、狭井川の上に在り。天皇其の伊須氣余理比賣の許に行幸きして、一夜御寝ませり。(其の河を佐章河と謂ふ由は、其の河邊に、山由理草多くあり。故に其の山由理草の名を取りて、佐章河と號づく。山由理草の本の名、佐章と云へり) 後に、其の伊須氣余理比賣、宮中に入れる時に、天皇、御歌あり曰く。

葦原の
菅の壘

醜しづき小屋に
彌清いさしきて

朕二人寝し

然して、生れたまへる御子の名は、日子八井命。次に、神八井耳命。次に、神沼河耳命(三人)。

△娶けん 奸通せんと
なり

天皇、崩御の後に、其の庶兄、當藝志美美命、其の嫡后、伊須氣
余理比賣に娶けむとして、其の三人の弟たちを殺さむと謀る時
に、其の御母、伊須氣余理比賣、患ひて、歌を以て、御子等に知
らしめたまへり、その歌に曰く。

狭井河從 雲立ち亘り
畝火山 木葉騒ぎぬ
風吹むとす

畝火山 晝は雲と居
夕去れば 風吹むとぞ
木葉騒げる

△夕去れば云々 晝は忍
びて居れど夕となれば
汝を殺さんと謀り居る
ぞと云ふ意

又歌ひて曰く。
其の御子たち、聞き知り、驚きて、乃ち、當藝志美美を殺さむと

△那泥 人を親み尊
びて云ふ稱

△稱へて 武勇を賞賛
して

△忌人 神祀を齋祀す
る職
△茨田 河内茨田郡

したまふ時に。神沼河耳命、其の兄神八井耳命に告げて曰く、那
泥、汝が命、兵を取りて、入りて、當藝志美美を殺したまへと云
ひたまふ。故に兵を取りて、入りて殺さむとしたまふ時に、手足
わなうきて、得殺したまはず。故に、其の弟、神沼河耳命、其の
兄の持たせる兵を乞ひ取りて、入りて、當藝志美美を殺したま
ふ。故に亦其の御名を稱へて、建沼河耳命と謂ふ。
爾に。神八井耳命、弟、建沼河耳命に譲りて曰く。吾は、仇を得
殺さず。汝は、既に、得殺したまへり。故に吾は兄なれども、上
と爲るべからず。是を以て、汝が命は上と爲つて、天下を治めた
まへ。僕は、汝が命を扶けて、忌人と爲りて、仕へ奉らむと曰ひ
たまふ。其の日子八井命は、茨田連、千島連の祖。神八井耳命は、
意富臣小子部連、阪合部連、火君、大分君、阿蘇君、筑紫三家

連、雀部臣、雀部造、小長谷造、都祁直、伊余國造、科野國造、道奥石城國造、常道仲國造、長狹國造、伊勢舟木直、尾張丹羽臣、島田臣等が祖なり。神沼河耳命は、天下を治めたまふ。凡て、此の神倭伊波禮毘古天皇、御年、一百三十七歳。御陵は、畝火山の北の方、白檮尾上に在り。

綏靖天皇の朝

神沼河耳命、葛城高岡宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇、師木縣主の祖、河俣毘賣を娶りて、生み給へる御子、師木津日子玉手見命(一人)。この天皇、御年、四十五歳。御陵は、衝田岡に在り。

安寧天皇の朝

師木津日子玉手見命、片鹽浮穴宮にありて、天下を治めたまふ。

△葛城高岡宮 大和葛上郡森脇村なりといへり

▲衝田岡 陵は今大和高市郡四條村

△片鹽浮穴宮 大和葛下郡浮穴村元三倉堂村

△縣主 師木縣主

△須知 伊賀名張郡周知△那婆理名張
△三井宮 三原郡甲良湊

△輕 大和高市郡輕村

此の天皇河俣毘賣の兄、縣主、殿延の女、阿久斗比賣を娶りて、生み給へる御子、常根津日子伊呂泥命、次に、大倭日子鉏友命。次に、師木津日子命。

此の天皇の御子等、并せて三王の中、大倭日子鉏友命は、天下を治めたまふ。次に、師木津日子命の子、二王あり。一子孫は、伊賀須知の稻置、那婆理の稻置、三野の稻置の祖。一子、和知都美命は、淡道の御井宮にあり。此の王二女あり。姉の名は、蠅伊呂泥。亦の名は、意富夜麻登久邇阿禮比賣命。妹の名は、蠅伊呂杼なり。此の天皇、御年、四十九歳。御陵は、畝火山の陰に在り。

懿德天皇の朝

大倭日子鉏友命、輕の境岡宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇、師木縣主の祖、賦登麻和訶比賣命、亦の名は、飯日比賣命

▲血沼 和泉國△多遲
麻但馬、竹、葦井は
同國なれど未詳

を娶りて生み給へる御子、御眞津日子訶惠志泥命。次に、多藝志比古命(二人)。
御眞津日子訶惠志泥命は、天下を治めたまふ。次に、當藝志比古命は、血沼の別、多遲麻の竹別、葦井の稻置の祖なり。此の天皇、御年、四十五歳、御陵は、畝火山の眞名子谷の上に在り。

孝照天皇の朝

御眞津日子訶惠志泥命、葛城掖上宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇、尾張連の祖、奥津余曾の妹、名は、余曾多本毘賣命を娶りて生み給へる御子、天押帶日子命。次に、大倭帶日子國押人命(二人)。弟、帶日子國忍人命は、天下を治めたまふ。兄、天押帶日子命は、春日臣、大宅臣、栗田臣、小野臣、柿本臣、壹比章臣、大阪臣、阿那臣、多紀臣、羽栗臣、知多臣、牟邪臣、都

△掖上 大和葛上郡三
室村

△秋津島 大和

△玉手岡 大和着上郡

△黒田廬戸 大和
△十市 大和

怒山臣、伊勢飯高君、壹師君、近淡海國造の祖なり。此の天皇、御年、九十三歳。御陵は、掖上博多山の上に住り。

孝安天皇の朝

大倭帶日子國押人命、葛城室の秋津島宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇、姪、忍鹿比賣命を娶りて生み給へる御子、大備諸進命。次に、大倭根子日子賦斗邇命(二人)。大倭根子日子賦斗邇命は、天下を治めたまふ。此の天皇、御年、一百二十三歳。御陵は、玉手岡の上に在り。

孝靈天皇の朝

大倭根子日子賦斗邇命、黒田廬戸宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇、十市縣主の祖、大目の女、名は、細比賣命を娶りて生み給へる御子、大倭根子日子國玖琉命(一人)。又、春日の千

千速真若比賣を娶りて生み給へる御子、千千速比賣命（一人）。又意富夜麻登玖邇阿禮比賣命を娶りて、生み給へる御子、夜麻登登母母曾毘賣命。次に、日子刺肩別命。次に、比古伊佐勢理毘古命。亦の名は、大吉備津日子命。次に、倭飛羽矢若屋比賣（四人）。又、其の阿禮比賣命の弟蠅伊呂杵を娶りて、生み給へる御子、日子寤間命。次に、若日子建吉備津日子命（二人）。此の天皇の御子等、併せて八王あり。（男王五、女王三）。大倭根子日子國玖琉命は、天下を治めたまふ。大吉備津日子命と、若建吉備津日子命とは、二王相共に、針間の氷河の前に、忌鏡を居ゑて、針間より進みて、吉備國を平定したへり。此の大吉備日子命は、吉備上道臣の祖なり。次に、若日子建吉備津日子命は、吉備下道臣、笠臣祖なり。次に、日子寤間命は、針間牛鹿臣の祖なり。次に、日

△片岡 大和葛下郡王子村

子刺肩別命は、高志の利波臣、豊の國前臣、五百原君、角鹿海直の祖なり。此の天皇、御年、一百六歳。御陵は片岡馬坂の上に在り。

孝元天皇の朝

大倭根子日子國玖琉命、輕の境原宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇、穗積臣等が祖、内色許男命の妹、内色許賣命を娶りて生み給へる御子、大毘古命。次に、少名日子建猪心命。次に若倭根子日子大毘賣命（三人）。又、内色許男命の女、伊賀迦色許賣命を娶りて、生み給へる御子、比古布都押之信命。又、河内青玉が女、名は、波邇夜須毘賣を娶りて、生みませる御子、建波邇夜須毘古命（一人）。此の天皇の御子等、并せて五王あり。

若倭根子日子大毘賣命は、天下を治めたまふ。其の兄、大毘古命の子、建沼河別命は、阿倍臣等が祖。次に、比古伊那許志別命、

△阿倍 伊賀阿拜郡

△山代 山城

此は、膳臣の祖なり。
 比古布都押之信命、尾張連等が祖、意富那毘が妹、葛城之高千那
 毘賣を娶りて、生み給へる子、味師内宿禰。此は、山代内臣の祖
 なり。又、木國造が祖、宇豆比古が妹、山下影日賣を娶りて、生
 み給へる子、建内宿禰。此の建内宿禰の子、并せて九（男七女
 二）。波多八代宿禰は、波多臣、林臣、波美臣、星川臣、淡海臣、
 長谷部君の祖なり。次に、許勢小柄宿禰は、許勢臣、雀部臣、輕
 部臣の祖なり。次に、蘇賀石河宿禰は、蘇我臣、川邊臣、田中臣
 高向臣、小治田臣、櫻井臣、岸田臣等の祖なり。次に平群都久宿
 禰は、平群臣、佐和良臣、馬御織連等の祖なり。次に、木角宿禰
 は、木臣、都奴臣、坂本臣の祖なり。次に、久米能摩伊刀比賣。
 次に、怒能伊呂比賣。次に、葛城長江曾都毘古は、玉手臣、的臣

△春日 大和

△鹿母 大和葛上郡

△丸邇 大和添上郡

△大筒木 山城綴喜郡

開化天皇の朝

生江臣、阿藝那臣等の祖なり。又、若子宿禰は、江野財臣の祖なり。
 此の天皇、御年、五十七歳。御陵は、劔池の中岡上に在り。

若倭根子日子大毘毘命、春日の伊邪河宮にありて、天下を治めた
 まふ。此の天皇、且波の大縣主、名は、由基理が女、竹野比賣を
 娶りて、生み給へる御子、比古由牟須美命（一人）。又、鹿母伊賀
 迦色許賣命を娶りて、生み給へる御子、御真木入日子印惠命、次
 に御真津比賣命（二人）。又、丸邇臣の祖、日子國意都都命の妹、
 意都都比賣命を娶りて、生み給へる御子、日子坐王（一人）。又、葛
 城の垂見宿禰の女、鷓比賣を娶りて、生み給へる御子、建豊波豆
 羅和氣王（一人）。此の天皇の御子等、并せて五人（男王四女王一）。
 御真木入日子印惠命は、天下を治めたまふ。其の兄、比古由牟須

美王の子、大筒木垂根王。次に、讚岐垂根王(二王)。此の二王の女、五人あり。

次に、日子坐王、山代の荏名津比賣、亦の名は、荻幡戸辨を娶りて、生み給へる子、大俣王、次に、小俣王、次に、志夫美宿禰王(三人)。又、春日建國勝戸賣が女、名は、沙本之大闍見戸賣を娶りて、生み給へる子、沙本毘古王。次に、袁邪本王。次に、沙本毘賣命。亦の名は、佐波遲比賣。此の沙本毘賣命は、伊久米天皇の后と爲せり。次に、室毘古王(四人)。又、近淡海の御上の祝が以ち齋く、天之御影神の女、息長の水依比賣を娶りて、生み給へる子、丹波比古多々須美知能宇斯王。次に、水穗真若王。次に、神大根王。亦の名は、八瓜入日子王。次に、水穗五百依比賣。次に御井津比賣(五人)。又、其の母の弟、袁都都比賣命を娶りて、生み

△伊久米天皇 垂仁天皇

△水穗 近江

給へる子、山代の大筒木真若王。次に、比古意須王。次に伊理泥王(三人)。凡て日子坐王の子、并せて十五王。

兄、大俣王の子、曙立王。次に、菟上王(二人)。此の曙立王は、伊勢の品遲部君、伊勢の佐那造の祖。菟上王は、比賣陀君の祖。次に、小俣王は、當麻勾君の祖。次に、志夫美宿禰王は、佐々君の祖なり。次に、沙本毘古王は、日下部連、甲斐國造の祖。次に、袁邪本王は、葛野之別、近淡海蚊野之別の祖なり。次に、室毘古王は、若狭之耳別の祖。其の美知能宇志王、丹波の河上の摩須郎女を娶りて、生み給へる子、比婆須比賣命。次に、真砥野比賣命。次に弟比賣命。次に朝廷別王(四人)。此の朝廷別王は、三川の穂別の祖。此の美知能宇斯王の弟、水穗真若王は、近淡海の安直の祖。次に、神大根王は、三野國造、本巢國造、長幡部連の祖なり。

△三川の穂 參河寶飲
△本巢 美濃
△長幡部 常陸久慈郡

△品遲 備後品治郡 播磨揖保郡
△阿宗
△伊邪河 大和添上郡 平城油坂町

次に山代の大筒木真若王、同母弟伊理泥王の女、母泥能阿治佐波毘賣を娶りて、生み給へる子、迦娶米雷王。此の王、丹波の遠津臣の女、名は、高材比賣を娶りて、生み給へる子、息長宿禰王。此の王、葛城の高額比賣を娶りて、生み給へる子、息長帯比賣命。次に、虚空津比賣命。次に、息長日子王（三人）。此の王は、吉備の品遲君、針間の阿宗君の祖。又、息長宿禰王、河俣稻依毘賣を娶りて、生み給へる子、大多牟坂王。此は、多遲麻國造の祖也。上に、いへる、建豊波豆羅和氣王は、道守臣、忍海部造、御名部造、稻羽忍海部、丹波の竹野別、依網の阿毘古等が祖なり。此の天皇、御年、六十三歳。御陵は、伊邪河の城の上に在り。

崇神天皇の朝

御真木入日子印惠命、師木水垣宮にありて、天下を治めたまふ。

△上毛 上野△下毛 下野

此の天皇、木國造、名は、荒河刀辨が女、遠津年魚目目微比賣を娶りて、生み給へる御子、豊木入日子命。次に、豊鉏入日賣命（二人）。又、尾張連の祖、意富阿麻比賣を娶りて、生み給へる御子、大入杵命。次に、八阪之入日子命。次に、沼名木之入日賣命。次に、十市之入日賣命（四人）。又、大毘古命の女、御真津比賣を娶りて、生み給へる御子、伊久米入日子伊沙知命。次に、伊邪能真若命。次に、國片比賣命。次に、千千都久和比賣命。次に、伊賀比賣命。次に、倭日子命（六人）。此の天皇の御子等、并せて十二王。（男王七、女王五）。

伊久米伊理毘古伊佐知命は、天下を治めたまふ。次に、豊木入日子命は、上毛野君、下毛野君等が祖なり。妹、豊鉏比賣命は、伊勢大神の宮を拜き祭りたまふ。次に、大入杵命は、能登臣の祖な

△人垣 儀式の時など
に人を垣の如く立列し
む。

り。次に、倭日子命。此の王の時に、始めて陵に人垣を立てた
り。

△美努 河内若江郡

此の天皇の御世に、疫病多く起り、人民死して盡さむとす。天皇
愁ひ歎きたまひて、神床に坐しませる夜、大物主大神、御夢に顯
れて、曰りたまはく。是は我が御心ぞ、故に意富多々泥古を以て
我が御前を祭らしめたまはく、神氣起らず、國安からむと。是を
以て、驛使を四方に分ちて、意富多々泥古と謂ふ人を求むる時
に、河内の美努村に、其の人を見得て進めたり。天皇、汝は、誰
が子ぞと、問ひ賜へば。僕は、大物主大神、陶都耳命の女、活玉
依毘賣を娶りて生み給へる子、名は、櫛御方命の子、飯肩巢見命
の子、建甕槌命の子、僕、意富多々泥古と白す。是に於て、天
皇、大に歡びたまひて、天下平らぎ、人民榮えなむと詔りあり、

△御諸 大和三輪山な
り

△毘羅河 土器の平形
にして淺きもの

△神壯夫 凡人ならぬ
男子

即ち、この意富多々泥古命を、神主として、御諸山に、意富美和
之大神前を拜き祭りたまへり。
又、伊迦賀色許男命に命じて、天之八十毘羅河を作り、天神、地
祇の社を、定め奉りたまふ。又、宇陀墨坂神に、赤色の楯矛を祭
り、又、大阪神に、黒色の楯矛を祭り、又、阪之御尾神、河瀬神
まで、遺すことなく、幣帛を奉りたまふ。此に因りて、疫氣悉く
息みて、國家平安となれり。
此の意富多々泥古と謂ふ人を、神の子と知れる所以は、上に云へ
る、活玉依賣命、其の容姿端正かりしより、神壯夫ありて、其の
形姿威儀、時に比ひ無きが、夜半の時、忽ち來り。相感じて、同
棲るほどに、未だ幾時もあらぬに、其の美人、懐妊みぬ。爾に、
父母、其の妊める事を怪しみて、其の女に、汝は、自ら、妊めり。

△閉蘇紡麻 麻糸なり

△三勾 三巻と云ふが如し

△美和山 大和

△鴨 大和葛上郡

△高志 今の越前加能登越中越後の名、上古

夫なきに、何に由て、妊めるかと問へば、答へて曰く。麗美はしき男子の、其の姓名も知らぬが、毎夕來て、共に住める間に、自づから懷妊はらめりといふ。是を以て、其の父母、其の人を知らむと欲して、女に誨へて曰く、赤土を、床前とこのまへに散らし、閉蘇紡麻へそを、針に貫きて、其の衣の欄すそに刺せと教ふ。故に教へし如くして、翌朝あしたにこれ見れば、針を著けたりし麻は、戸の鈎穴かぎあなより、控通ひきとほり出て唯、遣れる麻は、三勾みわのみなりき。即ち、鈎穴かぎあなより出ししことを知りて、糸に従ひ、尋ね行きしかば、美和山みわやまに至りて、神社に留まれり。故に其の神の子なりと知らる。其の麻の三勾みわ遣れるに因りて、其地を、美和みわと謂へるなり。此の意富多々泥古命おほたたらこのは、神君かみのきみ鴨君かものきみの祖なり。

又、此の御世に、大毘古命おほびこのみことを、高志道こしのみちに遣はし、其の子、建沼河たけぬか

△河遠江 駿河伊勢尾張三
 △武藏 上總下總常陸
 △陸奥 磐城岩代陸前
 △陸奥 磐城岩代陸前

△こはやめ 次句の爲に語
 △つはやめ 次句の爲に語
 △はなみ 次句の爲に語
 △はなみ 次句の爲に語

別命わかのみことをば、東の方十二道に遣はして、其の服従ふくじゆうせざるもの平定せしめ、又、日子坐王ひこいますのをば、且波國たなはのくにに遣はして、玖賀耳くがみみ之御笠のみかさを殺さしめたまへり。

大毘古命おほびこのみこと、高志國こしのくにに往ける時に、腰裳こしもを着けたる小女こをんな、山代やましろの幣へ羅阪らさかに立てり、小女歌ひて曰く。

こはや
 みまきいりびこはや
 己おのが緒をを
 後のち戸と從よ
 前まへ戸と從よ
 窺うかがはく
 みまきいりびこはや

御真木入日子みまきいりびこ
 竊ぬすみ弑ころせむと
 行いき違ちがひ
 行いき違ちがひ
 不し知らず
 不し知らず

で何の御心もなくおは
しますとの意

△我が庶兄 こゝでは
汝が庶兄と云ふに同じ
使ひざま也

△忌矢 戦ふ前に互に
一矢を射交す式なり

是に於て、大毘古命、怪しと思ひ、馬を返へして、其の小女に
汝が謂へる言は、何言ぞと問ひたまへば、小女、吾言はず。唯
歌をのみ詠へりと答へて、往く所も見えず、忽ちに失せたり。故に
大毘古命、還りて、天皇に請す時に、天皇詔たまはく。此は、思
ふに、山代國なる、我が庶兄、建波邇安王の、邪心を起せる表な
らむ。伯父軍を興して行けと、即ち、丸邇臣の祖、日子國夫玖命
を副へて、遣はす時に、丸邇坂に忌鏡を居えて、往く。山代の和
訶羅河に到れる時に、建波邇安王、軍を興して待ち遮り、各、河
を中に挟みて、對立して相挑む。故に其地の名を、伊杼美と謂
ひしを、今は今豆美と謂ふ。爾に、日子國夫玖命、其廂人、先づ
忌矢を放てと乞ふまゝに、建波爾安王、射つれども、得中てざり
き。然るに國夫玖命の放てる矢は、建波爾安王に射あて、死ね

△久須婆 河内

△波布理會能 山城相
樂郡祝園

△相津 岩代會津

△弓端の調 弓にて獲
たる獸肉獸皮等
△手末の調 絹布の類
なり

り。故に其の軍悉く破れて逃げ散りぬ、其の逃ぐるを追ひ迫めて
久須婆之度に到る時に、皆、迫め窘められて、屎出で、禪に懸れ
り。故に其地の名を、屎禪と謂ひしを、今は、久須婆と謂ふ。又
其の逃ぐる軍を遮りて斬れば、鵜の如く河に浮きたり、故に其の
河を鵜河と謂ふ。亦、其の軍士を斬波布理し故に、其地の名を、
波布理會能とも謂ふ。此の如く平らげ訖りて、覆奏したまへり。
大毘古命は、先の命に隨ひ、高志國に行き。爾に、東の方より遣
はされし、建沼河別、其の父、大毘古と共に、相津に往き遇ひた
まへり。故に其地を、相津と謂ふ。是を以て、各、遣はされたる
國を平らげて覆奏したまへり。天下大に平らぎ、人民富み榮え。
初めて、男の弓端の調、女の手末の調を奉らしむ。故に其の御世
を稱へて、初國所知し、御眞木天皇と謂ふ。又、是の御世に、

依網池を作り、亦、輕の酒折池を作る。此の天皇、御歳、一百六十八歳。御陵は、山邊道勾之岡の上在り。

垂仁天皇の朝

伊久米伊理毘古伊佐知命、師木玉垣宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇、沙本毘古命の妹、佐波遲比賣命を娶りて、生み給へる御子、品牟都和氣命(一人)。又、且波比古多々須美知能宇斯王の女、冰羽州比賣命を命りて、生み給へる御子、印色之入日子命。次に、大帶日子淤斯呂和氣命。次に、大中津日子命。次に、倭比賣命。次に、若木入日子命(五人)。又、其の冰羽州比賣命の妹、沼羽田之入毘賣命を娶りて、生み給へる御子、沼帶別命。次に、伊賀帶日子命(二人)。又、其の沼羽田之入日賣命の妹、阿邪美能伊理毘賣命を娶りて、生める御子、伊許波夜和氣命。次に、阿

△大帶日子淤斯呂和氣命 景行天皇

△狭山池 河内丹南郡
△日下高津 和泉
△鳥取 和泉日根郡

△河上部 河上宮の部族

邪美都比賣命(二人)。又、大筒木垂根王の女、迦具夜比賣命を娶りて、生み給へる御子、袁邪辨王(一人)。又、山代大國之淵が女、刈羽田刀辨を娶りて、生み給へる御子、落別王。次に、五十日帶日子王。次に、伊登志別王。又、其の大國之淵が女、弟刈羽田刀辨を娶りて、生み給へる御子、石衝別王。次に、石衝毘賣命。亦の名は、布多遲能伊理毘賣命(二人)。凡て、此の天皇の御子等、十六王(男王十三、女王三)。

大帶日子淤斯呂和氣命は、天下を治めたまふ。御身の長け、一丈二寸。御脛長さ四尺一寸。次に、印色入日子命は、血沼池を作り、又、狭山池を作り、又、日下の高津池を作りたまふ。又、鳥取の河上宮にありて、横刀壹千口を作らしむ。是を、石上神宮に納め奉りたまふ。即ち、其の宮にありて、河上部を定む。次に、

大津日子命は、山邊之別、三枝之別、稻木之別、阿太之別、尾張國の三野別、吉備の石无別、許呂母之別、高巢鹿之別、飛鳥君、牟禮之別等の祖なり。次に、倭比賣命は、伊勢大神宮を拜き祭りたまふ。次に、伊許婆夜和氣王は、沙本穴太部之別の祖なり。次に、阿邪美都比賣命は、稻瀬毘古王に嫁ひませり。次に、落別王は、小月之山君、三川之衣君の祖なり。次に、五十日帶日子王は、春日山君、高志池君、春日部君の子。次に、伊登志和氣王は、子無きに因りて、子代として、伊登志部を定む。次に、石衝別王は羽咋君、三尾君の祖。次に、布多遲能伊理毘賣命は、倭建命の后としたまへり。

此の天皇、沙本毘賣を、后と爲たまへる時に、沙本毘賣命の兄、沙本子古王、其の妹に、夫と兄とは、孰れが親しきやと問へば、

△八鹽折紐小刀
よく
鍛へたる短刀

兄ぞ親しきと答へたまふ。爾に、沙本毘古王、謀りて曰く。汝、寔に我を愛せば、吾と汝と天下を治むべしと。即ち八鹽折の紐小刀を作りて、其の妹に授け、此の小刀を以て、天皇の寢ませらむを、刺し殺しまつれと曰ふ。天皇、其の謀を知らず、後の御膝を枕にして寝ぬたまふ。其の後、紐小刀を以て、其の天皇の御頸を刺しまつらむとして、三度までこれを試みしも、忍へがたく哀しく情ひて、得刺しまつらずて、泣きたまふ涙、御面に落ち溢れたり。乃ち天皇、驚起きて、其の後に問ひたまはく。吾は、異しき夢を見たり。沙本の方より、暴雨降り來りて、急かに、吾が面を沾らし。又、錦色なる小蛇、我が頸に纏へり。此の如きの夢は、何の表にか有らむと問ひたまふ。其の後、争ふべからずと思ひて、即ち白したまはく。妾が兄、沙本毘古王、妾に、夫と兄と

は、孰れが親しきやと問ひたり。是の問ひに對し、面強く拒みも
 しかねて、兄ぞ親しと答へたれば、妾に誂て曰く。吾と汝と、天
 下を治めむ。故に天皇を殺しまつれと云ひて、八鹽折の紐小刀を
 作りて、妾に授けたり。是を以て御頸を刺しまつらむと欲ひて、
 三度まで試みしかども、忽ちに哀しくなりて、得刺しまつらず
 て、泣きたる涙の落ちて、御面を沾らしたり。必ず、是の表なる
 べしとまをしたまふ。爾に、天皇、吾は殆んど欺かれたるかど、
 詔りたまひて、乃ち、軍を興して、沙本毘古王を撃ちに遣はず
 時に、其の王、稻城を作りて、待ち戦ふ。此の時、沙本毘賣命、
 其の兄を忍び得ずして、後の門より、逃げ出で、其の稻城に入
 りませり。此の時、其の後、懷妊せり。是に於て天皇、其の后を
 愛しみ重んじたまふこと三年に至り、加ふるに懷妊の御身なれば

△稻城 堅固に構へたる城の稱

共に撃つに忍びたまはず、故に、其の軍を廻らしつゝ、急ぎて、
 攻めたまはざりき、此く逗留れる間に、其の妊める御子も、既に
 生れたまへば、其の御子を出だして、稻城の外に置き、天皇に白
 さしめたまはく。若し此の御子をば、天皇の御子と思しめさば、
 治め賜へと。是に於て天皇、其の兄をこそ、怨みたまへれ。猶ほ
 后をば、不得忍愛せり、故に、后を得たまはむとの心有り。是を
 以て、軍士の中にて、力子の輕捷なるものを撰び聚めて、宣りた
 まはく、其の御子を取らむ時、其の母王をも、掠め取れよ。或は
 髪、或は手、取り獲むまゝに、掬みて控出でよと、其の後、豫め
 其の情を知りたまひ、悉く、其の髪を剃りて、その髪を以て、頭
 を覆ひ、亦、玉緒を腐らして、手に三重に纏き、且つ酒を以て、
 御衣を腐らして、全き衣の如くして着たまへり。此の如く設け備

△玉緒は手に巻く飾の玉を貫く緒なり

へて、其の御子を抱きて、城外にさし出でたまふ。力士等、其の御子を取りまつりて、即ち、其の御母をも取らむと、其の御髪を握れば、御髪自ら落ち、其の御手を握れば、玉緒、且つ絶え、其の御衣を握れば、御衣、便ち破る。是を以て、其の御子を取りまつり獲て、其の御母をば得取りまつらす。其の軍士等、還り來りて、奉言しつらく、御髪、自ら落ち、御衣、また破れ、御手に纏かるゝ玉緒も絶えたれば、御母をば、獲まつらず、御子のみを取り得まつれりとまをす。天皇恨み悔み給ひて、玉を作りし人等を惡み、其の地を、皆、奪ひたまふ。故に、諺に、地得ぬ玉作と曰ふなり。天皇、其の後に詔らしめたまはく。凡て、子の名は、必ず、母の名くるものなり、是の子の御名をば、何とか稱けむと、答へ白したまはく。今、稻城を焼く時、火中に生れたれば、其の

△地得ぬ玉作 領地を得ぬ玉作にて思はぬ災難に遇へる事の譬へに言ふなり

△大湯座、小湯座 小兒に湯を浴びさす事を掌る婦人
△美豆の小紐 うるはしき下紐

御名は、本牟智和氣御子とせば、宜しからむと。又如何にして、養育せむと詔らしめたまへるに、乳母を取り、大湯坐、若湯坐を定めて、養育し奉るべしと答へ白したまへり。故に其の後の白したまひしまゝに、養育し奉れり。又、其の後に、汝の結びし美豆の小紐は、誰かも解かむと問はしめたまへば、且波比古多々須美智能宇斯王の女、名は、兄比賣、弟比賣、茲の二人の女王ぞ、淨き公民にませば、使ひたまふべしと答へ白さしめたまへり。然ありて、遂に、其の沙本比古王を殺したまへば、后も御兄と共に、火中に失せたまへり。

其の御子を率て遊べる状は、尾張の相津なる、二俣榎を二俣のまゝ小舟に作りて、持ち來りて、倭の市師池、輕池に浮べて、其の御子を率て遊ぶ。然るに、是の御子、八拳鬚、心前に至るまで、

△出雲大神 大國主大神

物言ひたまはず、高く往く鶴の聲を聞きて、始めて物言ひ初めたまへり。爾に、山邊の大鶴を遣して、其の鳥を取らしむ。是の人、其の鶴を追ひ尋ねて、木國より、針間國に到り、東の方に追ひ廻りて、近淡海國に到り、乃ち、三野國に越え、尾張國より傳ひて、科野國に追ひ、遂に、高志國に追ひ到りて、和那美之水門に網を張り、其の鳥を取りて、持ち上りて獻つれり。故に其の水門を、和那美之水門と謂ふなり。亦、其の鳥を見たまへば、物を言はむと思ひて、思ふが如く言ひたまふ事なかりき。是に於て天皇、患ひ賜ひて、御寢ませる時に、御夢に覺したまはく、我が宮を、天皇の御舎の如く修理せば、御子、必ず、物言ひたまはむと、此く覺しある時に、神の御心の現はるべき卜筮に占ひ合せて、何の神の心ぞと求むるに、爾の祟は、出雲大神の御心なりき。故に其の

△大神宮 出雲神門郡 杵築町官幣大多出雲大社

△鷺巢地 大和高市郡 四分村

御子をして、其の大神宮を拜ましめに、遣りたまはむとする時に、誰を副はしめば吉けむとすらなふに、曙立王、トにあへり、故に曙立王に命じて、誓を立てしめて曰く、此の大神を拜むに因りて、誠に驗あらば、是の鷺巢地の樹に住める鷺や、祈りの通りに落ちよ。此く詔りたまふ時に、其の鷺地に墮ちて死ねり。又祈りの通りに活きよと詔りたまへば、更に活きぬ。又、甜白櫛之前なる、葉廣熊白櫛を祈り枯し、亦祈り活かせり、其の曙立王に、倭老師木登美豊朝倉曙立王と謂ふ名を賜へり。即ち、曙立王、菟上王、二王を、其の御子に副へて、遣はす時に、那良戸よりは、跋盲遇はむ。大阪戸よりも、跋盲遇はむ。唯、木戸ぞ、掖へ曲り往くに吉き口なりと、トひて、出で行く時に、到る處の地毎に、品遅部を定めたり。

△黒櫨橋 皮附の木を
簀に編みて作りたる橋
假宮に往來の爲め假に
渡せる橋なり

△祝 神社に奉仕する
人の稱

△横櫨の長穗宮 出雲

△多和 低くたわみた
る處

出雲に到りて、大神を拜み訖りて、還り上る時に、肥河の中に、
黒櫨橋を作り、假宮を設けて坐さしめたり。爾に、出雲國造の
祖、名は、岐比佐都美、青葉山を飭りて、其の河下に立て、大
御食を献らむとする時に、其の御子詔りたまひつらく、是の河下
に、青葉山の如きは、山と見えて、山には非ず。若し、出雲の石洞
の會宮に坐す、芦原色許男大神を、受持ちて齋き祭れる祝が大庭
かと、問ひ賜ふ。御伴に遣はされたる、王等、聞き歡び、見喜び
て、御子をば、横櫨の長穗宮に置きまつり、驛使を上つる。其
の御子、一夜、肥長比賣に婚ひませり、其の美人を竊伺みたまへ
ば、蛇なりき。即ち、見畏れて、遁たまふ、肥長比賣患みて、海
原を光して、船より追ひ來れば、益、見畏れて、山の多和より、
御船を引き越して、逃げ下り行きたまへり。

△御子に因りて 御子
の名を後世に傳へん爲
になり

△弟國 山城乙訓

是に於て、覆奏して曰く、大神を拜みたまへるに因りて、大御子、
物言ひたまへる故に、參上り來れりと言ふ。天皇歡びて、即ち、
菟上王を返して、神宮を造らしむ。天皇、其の御子に因りて、鳥
取部、鳥甘部、品遲部、大湯坐、若湯坐を定めたまへり。又、其
の後の言に隨ひ、美知能宇斯王の女等、比婆須比賣命、次に、弟
比賣命、次に、歌凝比賣命、次に、圓野比賣命、并せて、四人を
喚び上げたまふ。然るに、比婆須比賣命、弟比賣命、二人を留め
て、其の妹王、二人は、甚だ醜くかりしに因りて、本土に返し送
りたまへり、是に於て圓野比賣、同じき、姉妹の中に姿醜きによ
りて、還さるゝ事、隣の里に聞えむは、甚だ慚しと言ひて、山代
國の相樂に到れる時に、樹の枝に取り懸りて、死なむとしたまひ
けり、故に其地の名を、懸木と謂ひしを、今は相樂と云ふなり。

△登岐士玖能迦玖能木實 四時ある香しき果物

△縵、矛 葉のある束、無き束によりて斯く名づけたり

△御立野 大和添下郡 齋音寺村

又、弟國おとくにに到れる時に、遂に、深き淵ふかきに墮おちちて死しにたまふ。故に其地の名を、墮國おちくにと謂いひしを、今は、弟國おとくにと云ふなり。又、天皇、三宅連等みやけのむらぢらが祖、名は、多遲摩毛理たぢまもりを、常世國とこよのくにに遣はして、登岐士玖能迦玖能木實のこのみを求めしめたまへり、多遲摩毛理たぢまもり、遂に、其の國に到りて、其の木實このみを採りて、枝えだのまゝ、八縵かひ、葉を取り去りたるもの八矛はつこを以て、歸り來れる間に、天皇、既に崩じたまふ、多遲摩毛理たぢまもり、縵四縵かひよかひ、矛四矛こよほこを分けて、太后に獻り、縵四縵、矛四矛實天皇の御陵の前に獻り置きて、其の木實を擧げて、叫よけび哭なびて、常世國とこよのくにの登岐士玖能迦玖能木實のこのみを、持ちて參り上りて侍まじふと、白して、遂に叫哭死おとびしに死ねり。其の登岐士玖能迦玖能木實といふは、今の橘なり。此の天皇、御年、一百五十三歳、御陵は、菅原の御立野の中に在り。又、其の太后、比婆須比賣命ひばすひめのみことの時、石祝作

△土師部 喪式の時の土器を作るもの、部族

△日代宮 大和式上郡 卷向山

景行天皇の朝

を定めたまひ、又、土師部はにしべを定めたまふ。此の後は、狹木の寺間はらまの陵みさぎに葬りまつれり。
大帶日子淤斯呂和氣天皇、纏向まきむくの日代宮ひしろのみやにありて、天下を治めたまふ。此の天皇、吉備臣等きびのみみらの祖、若建吉備津日子わかたけきびつひこの女、名は針間はりま之伊那毘能大郎女のいなびのおほいらつめを娶りて、生み給へる御子、櫛角別王くしつあわびの、次に、大碓命おほらうすのみこと、次に、大碓命、亦の名は倭男具那命やまとをくさのみこと、次に、倭根子命やまとねこの、次に、神櫛王かみくしのみこと(五人)。又、八坂入日子命やさかのいりひこのみことの女、八坂之入日賣命やさかのいりひめのみことを娶りて、生み給へる御子、若帶日子命わかたやしひこのみこと。次に、五百木之入日子命いほまきのいりひこのみこと。次に、押別命おしわけのみこと。次に、五百木之入日賣命いほまきのいりひめのみこと。又の妾めかけの子、豊戸別王とよとわの。次に、沼代郎女ぬしろのいらつめ。又妾めかけの子、沼名木郎女ぬなまきのいらつめ、次に、香余理比賣命かそよりひめのみこと。次に、若木之入日子王わかまきのいりひこの。次に、吉備之兄日子王きびのえひこの。次に、高木比賣

△國造 一國を治むる職

命。次に、弟比賣命。又、日向の美波迦斯毘賣を娶りて、生み給へる御子、豊國別王。又、伊那里能大郎女の妹、伊那里能若郎女を娶りて、生み給へる御子、眞若王。次に、日子人之大兄王。又、倭建命の曾孫、名は、須賣伊呂大中日子王の女、訶具漏比賣を娶りて、生み給へる御子、大枝王。凡て、此の大帶日子天皇の御子等、録さるゝは、廿一王。記さるる五十九王。并せて八十王の中に、若帶日子命と、倭建命。亦五百木之入日子命と、此の三王は、太子とまをす名を負はして、其餘の七十七王等は、悉く國々の國造。亦、和氣、稻置、縣主に別け賜へり。

若帶日子命は天下を治めたまひ。小碓命は、東西の荒ぶる神、不逞の徒を平げたまひ。次に、櫛角別王は、茨田下連等が祖。次に、大碓命は、守君、大田君、島田君の祖。次に、神櫛王は、木

△牟宜郡 美濃武藝郡

國の酒部阿比古、宇陀酒部の祖。次に、豊國別王は、日向國造の祖。

是に於て天皇、三野國造の祖、神大根王の女、名は、兄比賣、弟比賣、二嬢子、其の容姿麗はしと聞こしめし定めて、其の御子、大碓命を遣はして、喚び上げたまふ。其の遣はされたる、大碓命召し上げて、己、自ら其の二嬢子に婚けて、更に他の女を求めて、其の嬢女を詐りて上つれり。是に於て天皇、其、佗の女なることを知りて、恒に、つくづくと見つめたまふも、亦、婚しもせずて、惚しめたまふ。

大碓命、兄比賣を娶りて、生み給へる子。押黒之兄日子王。此は三野の宇泥須和氣の祖。亦、弟比賣を娶りて生み給へる子、押黒弟日子王。此は牟宜郡君等の祖なり。此の御世に、田部を定めた

△東之淡水門 安房と相摸三浦郡の御崎との間の入海の口
△坂手地 大和式下郡

まひ、又、東の淡水門を定めたまひ、又、膳之大伴部を定めたまひ、又、倭の屯家を定めたまひ、又、坂手池を作りて、其の堤に、竹を植ゑしめたまふ。天皇、小碓命に詔りたまはく。何ゆゑに、汝の兄、朝夕の大御食に、参り來らざる。汝來るやう教へ覺せと云ひたまふ。此く詔りたまひて後、五日に至るも、猶ほ参り出たまはず。天皇、小碓命に問ひ賜はく。何ぞ汝の兄、久しく來らざる。若し未だ誨へず有りやと、とひたまへば、既に仕まつると答ふ。又、如何に仕まつりたるかと詔りたまへば、答へて、朝曙に厠に入りし時、待ち捕へて、搦み批ぎて、其の手足を引闕きて、薦に裹みて投げ棄てたりと白したまへり。

是に於て天皇、其の御子の建く荒き情を恐れたまひて、詔りたまはく。西の方に、熊曾建二人あり。是れ不逞にして禮なきものども

△御髪を額云々 古は十五六歳迄髪を額に結びしもの皇子少年にますを云へるなり

なり。故に其れを取れと、のりたまひて遣はさる。此の時に當りて、皇子は尙ほ御髪を額に結びたまへり。小碓命其の姨、倭比賣命の御衣、御裳を給はり、小劔を、懷に納れて。行きたまふ、熊曾建が家に到りて、見たまへば、其の家の邊りに、兵を三重に圍み、室を作りて其中に居る。是に於て新築の祝宴をなさむと言ひふらして、食物を設け備へたり。故に其の傍にありて、其の祝宴の日を待ちたまへり。爾に、其の祝宴の日に臨みて、童女の髪のように、其の結べる御髪を梳り垂れ、其の姨の御衣、御裳を服て、全く童女の姿となりて、女人の中に交り立ちて、其の室内に入りたまへり。熊曾建、兄弟二人、其の嬢子を見感で、己が中に坐せしめ、盛んに、樂しめり。宴の酣なる時に臨みて、懷より、小劔を出だし、熊曾が、衣の衿を取りて、劔を以て、其の胸より、刺

△意禮 人を賤しめ罵る稱

△大倭 畿内の大和

△倭建御子 倭にて第一等の勇者との意

通したふ時に、其の弟、これを見て畏れて、逃げ出だすを、其の室の階下に追ひ至りて、其の背を取へて、劔を以て、尻より刺通したまふ。此時、熊曾建、白して曰く、其の刀を、動かしたまひと、僕、白すべき言ありと。是に於て暫らく許して、押し伏せたまふ。熊曾建白して曰く。汝が命は、誰なるぞと。吾は、纏向之日代宮に坐して、大八島國を知しめす、大帶日子淤斯呂和氣天皇の御子、名は、倭男具那王なり。意禮、熊曾建二人、不逞にして禮なしと聞こしめして、意禮を取り殺せと詔りたまひて遣せりと、云ひたまふ。熊曾建曰く、信に然らむ。西の方に、吾二人を除きて、建く強き人なし。然るに、大倭國に、吾二人に益して、建き男は、坐しけり。是を於て、吾れ御名を獻らむ。今より後、倭建御子と稱へ申すべしと。是の事を白し訖り、即ち熟したる瓜

△穴戸神 長門と豊前との間の海門に住める邪神

△肥河 出雲大原郡

△やつめさす 八雲立といふにおなじくいづもの枕詞

の如く、振り裂きて殺したまふ。故に其の時より、御名を稱へて、倭建命と謂ふ。然して、還りたまふ時に、山神、河神、又、穴戸神を、皆な平げて、上りたまふ。出雲國に入りて、其の出雲建を殺さむと欲ひて、こゝに到りて彼と交りを結び。竊かに、赤檮を以て、刀に詐作し、佩きて、共に、肥河に沐したまへり、爾に、倭建命、河より先づ上りて、出雲建が解き置ける横刀を取り佩きて、刀を易へむと云ひたまふ。後に、出雲建、河より上りて、倭建命の詐刀を佩く。是に於て倭建命、伊奢、刀合せむと呼び立てたまひ。各其の刀を抜く時に、出雲建、詐刀を得抜かず。即ち、倭建命、其の刀を抜きて、出雲建を打ち殺したまふ。命、歌よみたまはく。

八雲 刺す

出雲 建が

△つゞらさはまき柄
や輪に黒葛を澤山巻け
るなにいふ
△さみなし 刀の身の
なきなり

△比々羅木云々 終に
て作れる長き矛

佩 太 刀

黒葛多纏き

眞身無しに嗚呼

此く平定し、參上りて、覆奏したまへり。
爾に、天皇、亦續けて、倭建命に、東の方十二道の、荒ぶる神、
及び、服従せざる暴民等を、平定せよと、詔りたまひて、吉備臣
等が祖、名は、御鈕友耳建日子を副へて遣はす時に、比々羅木の
八尋矛を給ふ。命を受けて、行く時に、伊勢大御神宮に參りて、
神の朝廷を拜みたまひて、其の姨倭比賣命に白したまはく、天皇、
既く、吾を死ねとや、思すらむ、何なれば、西の方の悪人等を撃
ちに遣はして、返り來り、未だ幾時だも經ず、軍衆をも賜はず
して、今、更に、東の方十二道の悪人等を平げに遣はす。此に因
りて、思へば、猶ほ吾れ既く死ねと思しめすなりけりと、まをし

△相武相摸

て、患ひ泣きて出でらるゝ時に、倭比賣命、草那藝劍を賜ひ、亦、
火打を入れたる御囊を賜ひて、若し急かの事あらば、茲の囊の口
を解きたまへと云ひたまふ。尾張國に到りて、尾張國造の祖、美
夜受比賣の家に入り。乃ち、婚むと思し、かども、亦、還り上り
たらむ時にせむとて、期を定めて、東の國に行き山河の荒ぶる
神、及び、不逞の徒を、悉く、平定したまへり。相武國に到れる
時に、其の國造、詐りて白さく。此の野の中に大沼あり、是の沼
の中に住める神、甚だ敏捷にして亂暴なる神なりと。是に於て其
の神を看むとて、其の野に入りませしに、其の國造、野に火を
著けたり。命、欺かるゝを知りて、其の姨、倭比賣命の給ひし、
囊の口を開きて見たまへば、其の裏に火打あり。是に於て先づ其
の刀を以て、草を刈り撥ひ、其の火打を以ちて、火を打出し、向

△焼津 駿河益頭郡

△走水 相模三浦郡浦
賀觀音崎の燈臺より上
總高津の砲臺に向へる
所

△されさし 相模の枕
詞

火を著けて、焼き退けて、還り出で、其の國造等を、皆な切り滅し、即ち火を著けて、焼きたまへり、故に其地を、今に焼津と謂ふ。

其より入りて、走水海を渡る時に、其の渡の神、浪を興て、船漂ひて、得渡りまさず、爾に、其の妃、名は、弟橋比賣命、白したまはく。妾、御子に代りて、海中に入らむ、御子は、遣はさるゝ所の任を遂げて、覆奏したまふべしと、海に入りまさむとする時に、菅壘八重、皮壘八重、繩壘八重を、波の上に敷きて、其の上に乗して入水したまへり。是に於て其の暴浪、自ら伏きて、御船進むを得たり。其の妃、歌よみたまはく。

眞 嶺 刺
燃る 火 の
相模の小野に
火中に立ちて

△問ひし君はも 御尋
れ下された君よの意

△蝦夷 長き鬚多き人
種ゆゑ蝦になぞらへた
り

△根 乾飯なり

△阿豆麻波夜 吾妻は
やと嘆きまふなり

△酒折宮 甲斐山梨郡

△新治 常陸新治郡筑
波郡

問ひし君はも

七日ありて後に、其の妃の御櫛、海邊に依りたり。乃ち、其櫛を取りて、御陵を作りて、治め置けり。其より入りて、悉く、荒ぶる蝦夷等を平らげ、亦、山河の荒ぶる神等を定めて、還り上ります時に、足柄の坂本に到りて、御糧を食めす處に、其の坂の神、白き鹿に化けて來り立つ、其の咋遣の蒜の片端を以て、打ちたまひしかば、其の目に中りて、打殺されたり。其の坂に登り立ちて、三たび歎きて、阿豆麻波夜と云ひたまふ。故に其の國を阿豆麻と謂ふなり。即ち、其の國より越えて、甲斐に出で、酒打宮に坐しませる時に、歌ひたまはく。

新 治
幾夜か宿つる
筑波を過ぎて

△かいなへて 日数を計へて

△意須比 後世の婦のカツギ衣の類

△ひさかたに 詞ひとさかたに 詞ひとさかたに 詞ひとさかたに

爾に、其の御火焼の老人、御歌を續ぎて、歌ひけらく。

日 日 並 て 夜には九の夜

日 十 日 を

是を以て、其の老人を譽めて、即ち、東國造になしたまへり。其の國より、科野國に越えて、科野の坂神を従がへ、尾張國に還り來りて、先きに約せし、美夜受比賣の許に入りませり。是に大神食を獻る時に、其の美夜受比賣、大酒盞を捧げて獻る。美夜受比賣、其の意須比の欄に、月經著きたり。故に其月經を見て、御歌をよみたまはく。

弱 利 久 天 眞 渡 手 弱 腕 を 細 に の 方 の 香 山 眞 渡 る 杵 腕 を

△たかひか 腕のたかひか 腕のたかひか 腕のたかひか

△たかひか 腕のたかひか 腕のたかひか 腕のたかひか

美夜受比賣、御歌に答へて曰ひけらく。

枕かひとは 眞寢むとは 汝が著有 吾は爲れど 吾は思へど 襲の欄に

高 安 新 新 安 高 日 御 子 光 爲 見 間 間 の の 年 來 經 往 君 待 ち 難 だ に 有 著 有 諾 諾 月 立 立 著 有 月 立 立 著 有 月 立 立 著 有

爾に、御合まして、其の御刀の、草那藝劔を其の美夜受比賣の許に置きて、伊服岐能山の神を取りに行きたまふ。玆の山の神は徒手にて、直に取らむと、云ひたまひて、其の山に騰ります時に、山邊にて白き猪に逢へり。其の大き牛の如し。爾に、聲を擧げて云ひたまはく。是の白き猪に化れる者は、其の神の使者ならむ、今殺さずとも、還らむ時に、殺さむと云ひて、騰りたまふ。是に於て大氷雨を零して、倭建命を打惑はしたり。(此の白き猪に化れる者は、其の神の使者には非ずして、其の神の正身なりしき、聲を擧げたまへるに因りて、惑はされたまへるなり)。還り下りて、玉倉部の清水に到りて、息ひませる時に、御心、稍寤めたり。故に其の清水を、居寤清水と謂ふ。其處より發して、當藝野上に到りまし、時に、詔りたまへるは、吾が心、恒は、虚より

△當藝斯 能の古言

△杖衝坂 伊勢三重郡
采女村
△尾津前 伊勢幸名郡
戸津村

△たゞに 眞直ぐに向
きてある△吾兄 松を
愛してのたまへる なり
△太刀佩けましを 太
刀を佩すべきものを

△三重勾 勾餅の三重
に曲りたる如くの意勾

も、翔り行かむと念ひつるを、今は、吾が足得歩まず、當藝斯の形に成れりと。故に、其他を當藝と謂ふ。其地より、差少し行きますに、疲れ甚しきに因りて、御杖を衝きて、稍に、歩みたまふ。故に、其他を、杖衝坂と謂ふ。尾津前の一つ松の許に到りませしに、先きに、御食せし時。其他に忘れたりし御刀、失せずして、猶ほ有り、爾に御歌あり。

尾 張 に

尾津の前なる

ひとつまつ

太刀佩けましを

一松 吾兄を

直に向かへる

一松 吾兄を

人にありせば

衣著せましを

其地より、行きて、三重村に到りませる時に、亦、吾が足三重勾

餅は螺貝の如き形の餅

△能煩野 伊勢鈴鹿郡

△國のまほろば 國の中
の秀でたる所

△大和し愛し 大和は
愛すべき國なり

△疊菰 平群の枕詞

△平群 大和

△はしけやし 愛らし
くなつかしき

の如くなりて、甚く疲れたりと詔りたまふ。故に、其地を三重と謂ふ。其地より行きて、能煩野に到りませる時に、國を忍びて、歌ひたまはく。

大和は

疊 靡附

大和し愛し

又歌ひて曰く。

命の

疊 菰

隱白檜が葉を

此の歌は、思國歌なり。又、歌ひたまはく。

はしけやし

國の眞秀
青垣山隠れる

全けむ人は

平群の山の

髻に挿せ其子

吾家の方自

△片歌 旋頭歌の半分
なれば片歌と云ふ

雲井起ち來も

此は片歌なり。此の時、御病、甚だ急になれり。爾に、歌あり。

嬢女の

吾置さし

其大刀はや

床の邊に
劔の刀

と、歌ひ竟りて、即ち、薨じ給ふ。爾に驛使を馳せて告げ上る。是に於て倭なる妃等、及び、御子等は、何れも下り來まして、御陵を作りて、其地の、周圍に添ひたる田に、匍匐廻りて、哭きつゝ、歌ひたまはく。

靡附の

稻幹に

蘇葛

田の稻幹に
蔓延廻

△靡附 周圍に添ふ事

是に於て、八尋白智鳥に化りて、天に翔りて、濱に向きて、飛行けり。其の妃及び御子等、其處なる小竹の切株に、足、跳破るれども、其の痛きをも忘れて、哭々追ひいでませり。此の時の歌に曰く。

△足よ行くな 徒歩して行くことよ

浅小竹原 腰煩む
虚空は行かず 足従行くな

又、其の海潮に入りて、慕ひ行きましたし、時の歌に曰く。

△海垢行けば 海潮を追ふて行けば
△大河原云々 大河の廣き水上に生えたる草の涙にゆられて漂ふ如く吾等も海水の中に立ちていさよはるしよとなり

海垢行ば 腰煩む
大河原の 植草
海垢は 躑草

又、飛びて、其の磯に居たまへる時の歌に曰く。

濱千鳥 濱よは行かず

磯傳ふ

是の四歌は、皆、其の大御葬に歌ひたり。故に今に、其の歌は、天皇の大御葬に歌ふなり。其の國より、飛び翔り行きて、河内國の志幾に留りませり。故に其地に。御陵を作りて、鎮り坐さしめたり。其の御陵を、白鳥御陵と謂ふ。然れども、亦、其地より、更に、天翔りて飛び行させり。

△白鳥 河内市古郡輕墓村

△伊久玖天皇 景仁天皇

凡て、此の倭建命の、國を平げむと廻り行きたまふ時、久米直の祖、名は、七拳脛、恒に、膳夫と爲りて、従ひ仕へ奉れり、此の倭建命、伊玖米天皇の女、布多遲能伊理毘賣命を娶りて、御子、帶中津日子命を生み給へり（一人）。又、其の海に入りまし、弟橋比賣命を娶りて、生み給へる御子、若建王（一人）。又、近淡海の安國造の祖、意富多牟和氣が女、布多遲比賣を娶りて、生み

△犬上 近江國犬上郡

給へる御子、稻依別王（一人）。又、吉備臣、建日子の妹、大吉備建比賣を娶りて、生み給へる御子、建貝兒王（一人）。又、山代の玖々麻毛理比賣を娶りて、生み給へる御子、足鏡別王（一人）。又、或る女の生める子、息長田別王。凡て、是の倭建命の御子等、并せて六人あり。帶中津日子命は、天下を治めたまふ。次に、稻依別王は、犬上君、建部君等が祖。次に、建貝兒王は、讚岐綾君、伊勢之別、登袁之別、麻佐首、宮首之別等が祖。足鏡別王は、鎌倉之別、小津、石代之別、漁田之別の祖なり。次に、息長田別王の子、杵俣長比子王。此の王の子、飯野眞黒比賣命。次に、息長眞若中比賣。次に、弟比賣（三人）。上に云へる、若建王、飯野眞黒比賣を娶りて生み給へる子、須賣伊呂大中日子王。此の王、淡海の柴野入杵が女、柴野比賣を娶りて、生み給へる子、迦具漏

△山邊之道上 大和式上郡蓋谷村

比賣命。大帶日子天皇、此の迦具漏比賣命を娶りて、子、大江王を生み給へり、（一人）。此王、庶妹、銀王を娶りて、生み給へる子、大名方王。次に、大中津比賣命（二人）。此の大中津比賣命は、香阪王、忍熊王の御母なり。此の大帶日子天皇の御年、一百三十七歳。御陵は、山の邊の道上に在り。

成務天皇の朝

若帶日子天皇、近淡海の志賀の高穴穗宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇、穗積臣等が祖、建忍山垂根の女、名は、弟財郎女を娶りて、生み給へる御子、和訶奴氣王（一人）。建内宿禰を大臣と爲したまひ、大國小國の國造を定め、亦、國々の境、及び大縣、小縣の縣主を定め賜ふ。この天皇、御年、九十五歳。御陵は、沙紀の多他那美にあり。

△大臣 臣と云ふ姓にて官名にはあらず

仲哀天皇の朝

△穴門 長門
△訶志比宮 筑前糟屋郡香椎村

△淡道之屯家 淡路國の御料田の事を司る官舎
△大后息長帶日賣命 神功皇后
△神歸り 神の太后につぎ給へるなり
△熊曾國 今の日向大隅薩摩三國の地
△沙庭 神を降し奉る清淨なる場所

帶中日子天皇、穴門の豊浦宮、及び筑紫の訶志比宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇、大江王の女、大中津比賣命を娶りて、生み給へる御子、香阪王、忍熊王（二人）。又、息長帶比賣命を娶りませり。是の太后の生み給へる御子、品夜和氣命、次に、大輶和氣命。亦の名は、品陀和氣命（二人）。此の太子の御名を、大輶和氣命となせる所以は、初め生まるゝ時に、御腕に輶の形の如き肉ありし故に、其の御名に著け奉る。是を以て、腹中にましまして、國を定めたまへりしことを知られたり。此の御世に、淡道の屯家を定めたまふ。其の太后、息長帶日賣命には、當時神歸りたまへり。故に天皇、筑紫の訶志比宮にありて、熊曾國を撃ちたまはむとせし時に、天皇、御琴を控かして、建内宿禰大臣、沙

△所宮 柩を置く假立の宮

庭に居て、神の命を請ひ奉れり。是に於て太后神託をうけて、教へ覺したまはく、西の方に國あり。金銀を始めとし、目の耀く、種々の珍寶、其の國に多くあり、吾、今其の國を歸順せしめむと。天皇答へたまはく、高き地に登りて、西の方を見れば、國土は見えず、唯、大海あるのみとて、詐りの神と謂ひて、御琴を押退けて、控きたまはず、黙坐したまふ。其の神、大に、忿りて、凡そ茲の天下は、汝の治むべき國に非ず。汝は、一道に向へと云ひたまふ。是に於て建内宿禰大臣白しけらく。恐し。我が天皇、猶ほ其の大御琴を、弾きたまへとまをす。爾に、其の御琴を取依せて、心ならずも弾きたまひけるに、何程もあらずして、御琴の音聞えずなれり。即ち火を擧げて見まつれば、既に、崩じたまへり。驚ろき懼れて、殯宮に置き、更に、國の大奴佐を取りて、生剝、逆

△汝が命 神功皇后を指す

剝、阿離、溝埋、屎戸、上通下通婚、馬婚、牛婚、鶏婚、犬婚の罪の類ひを、種々求めて、國の大祓を爲し、亦、建内宿禰、沙庭に居て、神の命を請ひ奉つる。是に於て教へ覺したまふ狀、具さに、先日の如くにて、凡そ此の國は、汝が命の御腹にある御子の治むる國なりと教へ覺したまへり。
建内宿禰。恐し、我が大神、其の神の腹にある御子は、何の子ぞと白せば、男子ぞと答へたまふ。爾に具さに請ひまつりけらく。
今、此く、教へたまふ大神は、其の御名を知りたしと白せば、答へて、是は、天照大神の御心なり。亦、底筒男、中筒男、上筒男、三つの大神なり、(此の時、其の三の大神の御名は、顯れたまへり)。今寔に其の國を求めむと思はば、天神、地祇、亦、山の神、河海の諸神に、悉く幣帛を奉り、我か御魂を、船の上におき

△比羅傳 物を盛る平たき器

△新羅 今の朝鮮慶尙道江原道

△船腹乾さす云々 買物を送る船の絶間なき事
△百濟 今の朝鮮慶尙道忠清道

て、眞木の灰を瓠ひよこに納れ、亦、箸と比羅傳を多く作りて、皆々大海に散り浮かせて、度るべしとのりたまふ、故に備に教へ覺したまへる如くして、軍を整へ、船を列ねて、海を渡ります時に、海の魚ども大小を問はず、悉く、御船を負ひて渡れり。爾に、順風大に起りて、御船浪のまに／＼往けり。其の御船の波瀾、新羅の國に押し騰りて、既に、國の半まで到れり。是に於て其國王、恐懼して奏言しけらく、自今以後、天皇の命に隨ひ、御馬飼と爲て、毎年船を列ねて、船腹乾さす、梶櫂乾さす、天地と共に、何時までも仕へ奉らむと云ふ。是を以て、新羅國をば、御馬飼と定め、百濟國をば、渡屯家と定めたまふ。爾に、其の御杖を、新羅國主の城門に衝き立てたまひ。黒江大神の荒御魂を、國守の神と、鎮めまつりて、凱旋ありたり、征討の、未だ竟らざるに、懷妊せる

△筑紫 ころでは筑前
 △宇美 筑前糟屋郡宇
 彌村
 △伊斗村 筑前恬土
 郡
 △末羅 肥前松浦郡

御子、産れまさむとす、即ち御腹を鎮ひたまはむ爲めに、石を取
 りて、御裳の腰に纏き、筑紫國に渡りて、其の御子は生れたま
 ふ。故に其の御子を生みたまへる地を、宇美と謂へり。亦、其の
 御裳に纏きし石は、筑紫の國の、伊斗村にあり、筑紫の末羅縣の
 玉島里に到りて、其の河邊に御食せる時に、四月の上旬なりしか
 ば、其の河中の磯に坐して、御裳の糸を抜き取り、飯粒を餌とし
 て、其の河の年魚を釣りたまふ。(其の河の名を、小河といふ。
 亦、其の磯の名を、勝門比賣と謂ふ)。四月の上旬の時、女人、
 裳の糸を抜き、飯粒を餌にして、年魚を釣ること今に絶えず。
 是に於て、息長帶日賣命、倭に還幸の時に、人の心、疑はしさに
 因りて、喪船を、一つ具へて、御子を、其の喪船に載せまつり、
 先づ、御子は既に薨じたまふと言ひ漏さしむ。此くして上りたま

△斗賀野 攝津八部郡
 夢野村

ふ時に、香阪王、忍熊王聞きて、待ち受け撃たむと思ひ、斗賀野
 に進み出て、獲物によりて、吉凶を卜はん爲め、獵をしたまふ。
 爾に、香阪王、歷木に騰り見たまふに、大なる怒猪出で、其の
 歷木を掘りて、即ち、其の香阪王を食へり。其の弟、忍熊王、其
 の不吉を畏れずして、軍を興し待ち向へたまふ時に、喪船に赴き、
 其の備へなきを攻めたまはむとす、然るに喪船より、軍を下して、
 相戦ふ。此の時、忍熊王は、難波吉師部の祖、伊佐比宿禰を、將
 軍と爲し、太子の御方には、丸邇臣の祖、難波根子建振熊命を、
 將軍と爲したまふ。追ひ退けて、山代に到れる時に、還り立ちて、
 各、退かすて相戦へり、爾に、建振熊命、權りて、息長帶日賣命
 は、既に崩じたまへば、更に、戦ふべきこと無しと云はしめ、絃
 を絶ちて、欺りて歸服せり。其の將軍、詐を信じて、弓を弭し、

△逢坂 山城近江の國
境
△沙沙那美 近江濠賀
縣

△いざあぎ伊佐比宿
兄よの意にて伊佐比宿
彌をさす御方の大將
太子の爲めに大將
振熊命の御方と
意手負はんとおはす
痛手負はんとおはす
ふ意手負はんとおはす
の意手負はんとおはす
と、歌ひて、即ち、海に入りて、共に、死せたまへり。
建内宿禰命、其の、太子を率れまつりて、禊せむとして、淡海、
及び若狭國を經し時に、高志前の角鹿に、假宮を造りて坐せま

兵を藏む。爾に、頂髪の中より、設けたる弦を採り出し（一名は宇
佐由豆留と云ふ）更に張りて追ひ撃てり、逢坂に逃れ退きて、對立
して、亦、戦ひしを、追ひ追め敗りて、沙沙那美に出で、悉く、
其の軍を斬りけり。忍熊王、伊佐比宿禰と共に、追ひ追められ
て、船に乗り、海に浮びて、歌ひて曰く。

率 率
振 熊 が
鵬 鵬 の
潜 潜 ぎ せ な 吾
吾 君
痛 痛 手 負 は ず は
淡 淡 海 海 に

と、歌ひて、即ち、海に入りて、共に、死せたまへり。

建内宿禰命、其の、太子を率れまつりて、禊せむとして、淡海、
及び若狭國を經し時に、高志前の角鹿に、假宮を造りて坐せま

△入鹿 海豚

△都奴賀 敦賀

つれり、其地にある、伊奢沙和氣大神之命、夜の夢に見えて、御
子の御名を賜はりて、吾が名にせむと、欲ふと云へり。爾に、祝き
て、恐し、命に隨ひ易へ奉らむと白す。亦、其の神、詔りたまは
く。明日の旦、濱に幸きあるべし、名易の禮物を獻らむと、故に、
其の旦、濱に幸きせる時に、鼻の毀れたる入鹿魚、既に、一浦
に寄れり。是に於て、御子、神に白さしめて、我に、御食の魚を
給へりと云はしめたまへり。故に、亦其の御名を稱へて、御食津
大神と云ひ、今に氣比大神とも謂へり。亦、其の入鹿魚の鼻の血
鼻かりき、故に其の浦を血浦と謂ひしを、今は、都奴賀と謂ふな
り。
是に於て、還幸の時に、其の御母、息長帶日賣命、待酒を醸して
獻らる。其の御母の御歌に曰く。

祖神 △くしのかみ 遣酒の

△壽狂ほし壽廻し
ろくして祝ふ意 い

△あさすをせ云々俗
にサアく盃を乾さす
引受けくめてめしあが
れとの意

△そのついでみすに打た
て、白をクチツマミを打
ち、上を立てそなへての
意、酒を古は口鼓をうち
うすにたたくりしなり。つ
けて酒を醸すこと△を儲
か

みけはかも酒を醸し
けはにやの意△この
みきのあやにうたぬ
しさい此の御酒を飲
めば飲むほごいよく
樂しさの増すことよサ
アとの意

△酒樂の歌 祝盃を舉
ぐる時の歌

△輕島之明宮 大和高
市郡輕 河内古市郡
△品陀

此御酒は 吾御酒ならず
酒首長 常世に坐す
石立す 少名御神の
神壽 壽狂ほし
豐壽 廻し
獻り來し御酒ぞ 酒さず飲せ誘々
此く歌ひて、大御酒獻らる。爾に、建内宿禰命、御子の爲に答へ
奉れる歌に曰く。

此御酒を 醸みけむ人は
其鼓 白に立てし
歌ひ 醸けれかも
舞ひ 醸けれかも
乍 醸けれかも
乍 醸けれかも

此御酒の 醸みきのあやに
轉樂し誘々
此は、酒樂の歌なり。
凡て、帶中津日子天皇の御年、五十二、御陵は、河内の惠賀の
長江に在り。

應神天皇の朝

品陀和氣命、輕島の明宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇
品陀眞若王の女、三人の女王を娶りませり、一人の御名は高木之
入日賣命、次に、中日賣命、次に、弟日賣命。此の女王等の父品
陀眞若王は、五百木之入日子命、尾張連祖、建伊那陀宿禰の女、
志理都紀斗賣を娶りて、生み給へる子なり、故に高木之入日賣命
の御子、額田大中日子命。次に、大山守命。次に、伊奢之眞若命

次に、妹大原郎女おほはらのいらつめ。次に、高目郎女たかくのいらつめ（五人）。中日賣命の御子、木之荒田郎女のあらたのいらつめ。次に、大雀命おほささぎのみこと。次に、根鳥命ねとりのみこと（三人）。弟日賣命の御子、阿倍郎女あべのいらつめ。次に、阿具知能三腹郎女あはぢのみのいらつめ。次に、木之苑野郎女きののゑのいらつめ。次に、三野郎女みのいらつめ（五人）。又、丸邇之比布禮能意富美の女、名は、宮主矢河枝比賣みやぬしやかはえひめを娶りて、生み給へる御子、宇遲能和紀郎子うぢのわさきいらつめ。次に、妹八田若郎女やたのわきいらつめ。次に、大鳥王おとりのみこと（三人）。又、其の矢河枝比賣の妹、袁那邊郎女をなべいらつめを娶りて、生みませる御子、宇遲之若郎女うぢのわきいらつめ（一人）。又、昨俣長日子王くはまたながひこのみことの女、息長真若中比賣おきながまわかなかひめを娶りて、生み給へる御子、若沼毛二俣王わかぬけふたまたのみこと（一人）。又、櫻井田部連の祖、島垂根の女しまたね、糸井比賣いとひめを娶りて、生み給へる御子、速總別命はやもとのわか（一人）。又、日向之泉長比賣いづみのながひめを娶りて、生み給へる御子、大羽江王おほはたのみこと。次に、小羽江王こはたのみこと。次に、幡日之若郎女はたひのわきいらつめ（三人）。又、迦具漏比賣かぐろひめを娶りて、生み給へる

△糸井 大和式下郡

△泉 薩摩出水郡

△伊奢能麻和迦王いせのまわかのみことの御上
 の高木入比賣命たかきいりひめのみことの御子
 の腹に生れたまへる御子
 の中に既に出来たる御子
 の此處は紛れ入りたるな
 るべし又御子の數にも
 合はず

△佐邪岐阿藝 雀吾君

御子、川原田郎女かはらたのいらつめ、次に、玉郎女たまのいらつめ、次に、忍坂大中比賣おさかのおほなかつひめ。次に、登富志郎女とほしのいらつめ。次に、迦多遲王かたぢのみこと（五人）。又、葛城之野伊呂賣かつらぎのぬいらつめを娶りて、生み給へる御子。伊奢能麻和迦王いせのまわかのみこと（一人）。此の天皇の御子等、併せて、廿六王にじゅうろくにみこと（男王十一、女王十五）。此の中に、大雀命は、天下を治めたまふ。
 是に於て、天皇、大山守命と、大雀命とに、汝等は、兄なる命と、弟なる命と、孰か愛しきと問ひたまふ。（天皇の是く問ひたまへる所以は、宇遲能和紀郎命うぢのわさきいらつめのみことに、天下を治めしめむとの心あればなり）。爾に大山守命、兄なる命ぞ、愛しきと云ひたまふ。次に、大雀命は天皇の間ひ賜ふ、御情みこころを知りて、兄なる命は、既に、成人つれば、憂ふること無きも、弟なる命は、未だ人と成らねば、是ぞ、愛しきと、まをしたまふ。天皇詔りたまはく。佐邪岐阿藝さださきあぎの

人、名は、仁番。亦の名は、須々許理等、渡り來る。是の須々許理、大御酒を醸して獻れり。是に於て天皇、是の獻つれる大御酒に、心浮き立ちて、御歌あり、曰く。

須々許理が 醸みし御酒に

吾醉ひにけり

事 和 酒 咲 酒 に

吾醉ひにけり

此く歌ひつゝ行幸せる時に、御杖を以ちて、大坂の道の中なる大石を打ちたまひしかば、其の石走り避けたり。故に諺に、堅石も醉人を避くると曰へり。

天皇、崩御の後に、大雀命は、天皇の命の従ひ、天下を宇遲能和紀郎子に譲りたまふ。是に於て大山守命は、天皇の命に違ひて、

△すゝの歌は上の句を五七七と七
下の句を五七七としら
べの句を五七七としら
はゆたる旋頭歌なり世に
となるし意△心△慰む美
酒といふ意面白くなる
飲といふ意面白くなる

△舍人 天皇の左右近く仕へ奉るもの

猶ほ天下を獲むと欲し、其の弟皇子を殺さむとするの心有りて、竊かに、兵を設けて攻めむとしたまへり、爾に、大雀命、其の兄の兵を備ふるを聞き、即ち、使者を遣りて、宇遲能和紀郎子に告げしめたまふ。故に聞き驚きて、兵を河邊に伏し、亦、其の山の上、絶垣を張り、帷幕を立て、詐りて、舍人を王と爲して、露はに、吳床に坐せしめ、百官恭敬して往來するの狀、宛も王子の坐所の如くし、更に、其の兄王の河を渡らむ時の爲めに、船楫を具へ飾り、亦、佐那葛の根を舂き。其の滑かなる汁を取りて、其の船の下の、簀椅に塗りて、蹈みて作るべく設けて、其の王子は、布の衣禪を服て、賤人の形に爲りて、楫を取りて、船に立ちたまふ。是に於て其の兄王、兵士を伏せ、鎧を衣の中に服せて、河邊に到りて、船に乗らむとする時に、其の嚴しく飭れる處を望

悲しけく
射放らずぞ歸る

此に思ひ出
梓弓檀弓

其の大山守命の屍をば、奈良山に葬れり。是の大山守命は、土形君、弊岐君、榛原君等が祖なり。是に於て大雀命、宇遲能和紀郎子の二王子、互に天下を譲りたまふ間に、海人い、大贄を貢つる。兄王は辭みて弟王に貢らしめたまひ、弟王は、また、兄王に貢らしめて、相譲りたまふ間に、既に、多くの日を経れり。此く相譲りたまふこと、一二度に非ざれば、海人は、既に、往還に疲れて泣きけり。故に、諺に、海人なれや、己物から泣くと曰へり。然るに、宇遲能和紀郎子は、早く薨じたまひたれば、大雀命、天下を治めたまふ。

又、昔、新羅國主の子あり。名は。天之日矛と謂ふ。是の人、渡

△海人い いは詞を強めていふ時に用ふる古言

△天之日矛 歸化後の名なり

り來る。渡り來る所以は、新羅國に、一の沼あり。名を、阿具奴摩と謂ふ。此の沼の邊に、一賤女の、晝寢せるあり。是に於て日の光、虹の如く、其の陰上を指したるを、亦、一賤夫あり、其の狀を異し、恒に、其の女の行ひを伺ひけり。是の女、其の晝寢したりし時より、妊みて、赤玉を生めり。其伺ふ所の賤夫、其の玉を乞ひ取りて、恒は裏みて、腰に著けたり。此の人、山谷の間に、田を作りければ、耕人等の飲食を一牛に負はせて、山谷の中に入りしに、其の國主の子、天之日矛遇へり、賤夫に問ひて曰く。何ぞ、汝は、飲食を牛に負はせて、山谷へ入るや、汝、必ず、是の牛を殺して食ふならむと曰ひて、即ち、其の人を捕へて、獄囚に入れむとすれば、其の人答へて曰く。吾、牛を殺さむとするに非ず、唯耕人の食を送るのみと。然れども、猶ほ、赦さざれば、

△凡た 十中八九迄は

其の腰なる玉を解きて、其の國主の子に贈る、故に其の賤夫を赦して、其の玉を將ち來りて、床邊に置きしかば、即ち、美麗き娘子に化れり。乃て之れと婚ひして、嫡妻と爲せり。其の娘子、常に、種々の珍珠を設けて、其の夫に進む。其の國主の子、心奢りて、妻を罵れば、其の女、凡た吾は、汝の妻となるべき女に非ず。吾が祖の國に行かむとすと言ひて、竊かに、小船に乗りて、逃げ渡り來りて、難波に留まれり。（此は難波の、比賣基會社にます、阿加流比賣と謂ふ神なり）。是に於て天之日矛、其の妻の遁れしことを聞きて、乃ち追ひ渡り來りて、難波に到らむとする間に、其の渡の神、遮りて入れず。故に、更に、還りて、多遲摩國に着けり。即ち、其の國に留りて、多遲摩の俣尾が女、名は前津見を娶りて、生める子、多遲摩母呂須玖。此の子、多遲摩斐泥

△玉津寶 貴く美しくし
 △珠二貫 緒に貫きたる二連の玉
 △奥津邊都 二面の寶鏡の稱
 △伊豆志 但馬出石

此の子、多遲摩比那良岐。此の子、多遲摩毛理。次に、多遲摩比多訶、次に、清日子（三人）。此の清日子、當摩之咩斐を娶りて、生める子、酢鹿之諸男。次に、妹耆龜由良度美。上に云へる、多遲摩比多訶、其の姪由良度美を娶りて、生める子、葛城之高額比賣命。（此は息長帶比賣命の御祖。其の天之日矛の、持渡り來れる物は、玉津寶と云ひて、珠二貫、又、振浪比禮、切浪比禮、振風比禮、切風比禮、又、奥津鏡、邊津鏡、并せて、八種なり。（此は、伊豆志之八前大神なり）。茲の神の女、名は、伊豆志袁登賣神あり、八十神是の伊豆志袁登賣を得むとすれども、皆、得ず。是に二の神あり。兄を、秋山之下氷壯夫と云ひ、弟を、春山之霞壯夫と云ふ。其の兄、其の弟に謂へらく。吾、伊豆袁登賣を乞へども、得ず。汝、此の娘子を得てむ乎といへば、易く得てむ

△宇禮豆玖 此は事成
就へん若成せば汝
に與へん汝より取らば
上の品々を汝より取らば
人の像を約しおくこと
をいふ。ウレツクツク
な俗に賭ケツクツクに
なす。いふ。ツクツクに
お。

と曰ふ。其の兄の曰く、若し、汝、此の嬢子を得ば、上下の衣服
を去り、身の丈を量りて、甕に酒を醸し、亦、山河の物を悉く備
へ設けて、宇禮豆玖をなすべしと云ふ。其の弟、兄の言へる如く、
具さに、其の母にまをせば、即ち、其の母、布遲葛を取りて、一夜
の間に、衣、禪、襪、沓まで織り縫ひ、亦、弓矢を作りて、其
の衣禪を服せ、其の弓矢を取らせて、其の嬢子の家に遣りしか
ば、其の衣服も、弓矢も、悉く、藤花となれり。是に於て其の春
山之霞壯夫、其の弓矢を嬢子の厠に懸けたるを、伊豆志袁登賣、
其の花を異しと思ひて、將ち來る時に、其の嬢子の後に立ちて、
其の屋に入りて、婚ひして、一子を生またり。爾に、其の兄に、
吾は、伊豆志袁登賣を得たりと曰ふ。是に於て、其の兄は、弟の
得たることを慥き、其の宇禮豆玖物を償はず。其の母に愁ひて云

△八目 大なる目

ふ時に、母答へて曰く。我が御世の事、能く神に習ふべし。然る
に却て人の所爲に習へばにや。其の物を償はぬなりといひて、其
の兄なる子を恨みて、乃ち、其の伊豆志河の河島の一節竹を取り
て、八目の荒籠を作り、其の河の石を取り、鹽に合せて、其の竹
の葉に裹み、詛ひ言はしめて曰く。此の竹の葉の青むが如く、此
の竹の葉の萎むが如く、青み萎め、又、此の鹽の盈ち乾るが如
く、盈ち乾よ、又、此の石の沈むが如く、沈み臥せと。此く詛ひ
て、竈の上に置かしむ。是を以て、其の兄、八年の間、干き萎み、
病て臥したり。其の兄、患ひ泣きて、其の母に請へば、即ち、其
の詛ひ物を返さしむ。是に於て其の身、本の如く安らげり。(此
は、神宇禮豆玖と言ふことの本なり)。
又、此の品陀天皇の御子、若野毛二俣王、其の母妹百師木伊呂辨

△神宇禮豆玖 物を賭
けて誓を立つる事の初
まりなり

亦の名は、弟日賣眞若比賣命を娶りて、生み給へる子、大郎子。
 亦の名は、意富々杼王。次に、忍坂之大中津比賣命。次に、田井
 中比賣。次に、田宮之中比賣。次に、藤原之琴節郎子。次に、取
 賣王。次に、沙彌王（七人）。意富々杼王は、三國君、波多君、
 息長君、坂田酒人、山道君、筑紫の米多君、布勢君等の祖なり。
 又、根鳥王、庶妹三腹郎女を娶りて、生み給へる子、中日子王。
 次に、伊和島王（二人）。又、堅石王の子は、久奴王なり。
 凡て、此の品陀天皇、御年、一百三十歳。御陵は、川内惠賀の裳
 伏岡に在り。

今文古事記（中卷）終

標今文古事記（下卷）

仁德天皇の朝

△高津宮 宮跡は大坂
 天王寺より正北なる味
 原に通ふ中間に平野神
 社ある地なりといふ

△波多毘能若郎女 後
 に雄畧天皇の皇后

大雀命、難波の高津宮にありて、天下を治めたまふ。此の天皇、
 葛城之會都毘古の女、岩之日賣命（太后）を娶りて、生み給へる
 御子、大江之伊邪本和氣命。次に、墨江之中津王。次に、蜷之水
 齒別命。次に、男淺津間若子宿禰命（四人）。又、上に云へる、日
 向の諸縣君、牛諸が女、髮長比賣を娶りて、生み給へる御子、
 波多毘能大郎子。亦の名は大日下王。次に、波多毘能若郎女。亦
 の名は、長日比賣命。亦の名は若日下部命（二人）。又、庶妹八田